

わが國のマルサス研究史

——トーマス・ロバート・マルサス文獻目録に寄せて——

市 原 亮 平

序 言

わが國におけるT・R・マルサス文獻に関しては、いままで統一的綜合的なものがなかつた。小田橋貞寿氏や兩亮三郎氏や吉田秀夫氏や総理庁統計局や日本エネスコ委員会の人口問題文獻目録や人口問題史の諸著作があるが、これらは人口論者マルサスに限られたものであつたり、集録範圍が時代的に限られていたりして、明治・大正・昭和三代を洩れなく披い、またマルサスの人口論はもろろんその經濟理論にもわたつてひろく採つたものはない。すでに經濟学部資料部はわが國におけるマックス・ウェーバーおよびJ・S・ミル文獻目録をおくつているが、⁽²⁾こんどまた本学図書館書目課長天野敬太郎氏の御努力によつてマルサス文獻目録をおくり、以上に述べた欠を補うことになつた。わたくしも本目録掲載を御願ひしたり作製に一部分協力した手前もあつて、文獻紹介をかねて日本におけるマルサス研究

史を素描し近代日本の社會經濟思想史を官府イデオロギーに支えられながら縦貫するマルサス山脈ともいうべき一偉容とことごとりとくむための準備稿にしたいとおもう。

すでにミルに関しては目録とともに杉原教授の研究史覚え書があたえられているし、やがて天野氏の御尽力でリカードウ文獻目録も作製される筈であり、本学における古典派經濟学の文獻史的考察は緒についたといえよう。ひろく日本學界を見廻しても、「本邦アダム・スミス文獻」が刊行され、先進國と後進國との二重的な社會——經濟構造をもつ特殊な社會風土に制約され、複雑多岐な觀念構築をもつわが國近代思想史の一角にするどい文獻學的メスがくわえられている。古典派、正統派經濟學がそれぞれこの日本社會にいかに入力され消化されいかに政策——實踐論の舞台にひきあげられたかを各個に追いつめていく作業の集成として、いわば研究史的省察の成果として、わが國に移植されたスミス山脈がリカードウ山脈がミル山脈がひいては

マルサス山脈が日本イデオロギーのあるべき部分に位置づけられ、それぞれ山脈の脈絡と前後関係とが、さらに統治構造との対応関係が照射されるとおもわれる。すでに戦前・戦後にわたる日本資本主義論争の戦塵にまみれた歴史をもつたわたくしたちは比較的多くの日本の社会経済構造論をもつているが、一方これと照応する観念構造論に関しては割合に不毛であつて、たとえば丸山真男氏や石田雄氏のユニークな政治思想史の近時の業績をみると、社会経済思想史の研究面のたちおくれは否めないようにおもわれる。

わたくしじしん日本人口論史にとりくみ、日本の社会経済思想史上でいかにマルサスが巨大な陰影をおとしているかそこにおけるマルサス山脈の開鑿がいかに立ち遅れているかにいまさらのように驚き、そのアプローチの方法的整序の要にせまられるとともに、その準備作業としてマルサス文献の目録作製と研究史的省察がいかに重要であるかを思い知らされたのであつて、この覚え書もこのわたくしなりのまづしい反省に出たものである。

(1) マルサス説をふくめて日本人口論の体系立つた史的研究はいまのところ、吉田秀夫「日本人口論の史的研究」(昭和一九)に限られており、吉田氏のこの研究すら日清戦争にいたる迄の明治日本を対象が限られている。マルサス文献の目録や紹介をおこなつたまとまつた文献は割合に多いが、取材の範囲を三代にひろげ人口論だけでなく経済理論

にもひろげたものは一冊もないのが現状である。目録として比較的まとまつたものを次にあげておこう。——総理庁統計局「邦文人口関係文献並資料目録」(昭和二七)および日本ユネスコ委員会「人口問題関係文献目録」(昭和二〇年以降各年版)が網羅的で単行本も雑誌も蒐めマルサスに關しても人口論のみでなく経済理論関係のものも含めており、前者は戦前のものまでふくんでなかなか貴重である。しかし前者は目録作製の責任者がいつているように、戦時中の文献はもちろん戦前のももかなり欠いて不備であり、解題も不充分である。日本経済研究会の小田橋貞寿氏「日本における人口問題文献」(上田貞次郎編「日本人口問題研究」昭和八年第一輯所収)および賀井善智「続日本人口問題文献」(同「日本人口問題研究」昭和十二年第三輯所収)があるが、これらはいづれも日本経済研究会の研究方向に偏心し、前者は将来人口の予測に關し、後者は失業人口の測定に關し文献蒐集の重点が置かれていて、小田橋氏も「経済原論、経済学史で人口理論を取扱はぬものはない。けれども此等を列記することは無意味と思へるので、全然ここに載せなかつた。又社会政策、社会問題に關する著者の多くも人口問題に説き及んでゐるが、之亦ここに列挙するの煩に堪えなかつた」と断つてゐるとおりである。したがつて経済学者マルサスはまつたく埒外におかれており、解説も細疏一定してゐない。マルサス百年忌を記

念して昭和十年にマルサス文献目録が二つあらわれた。加田哲二編「マルサス人口論及び経済学説関係文献」(三田学会雑誌、二九卷一号)と人口問題研究会編「マルサスに関する文献集」(人口問題資料第八集)である。前者は人口論とともに経済理論関係の文献を掲げているが、大抵の此種目録がさうであるとおりの目録も日本の文献についてはきわめて不親切で、単行本は掲げられているが、雑誌・論文はまったくしめていない。後者は吉田秀夫氏の手になるもので、第四部には第三部までに掲げたマルサス関係の欧文文献の邦訳のものを集録したにすぎない。マルサス生誕一五〇年を記念してマルサス特集号をおくつた経済論叢第二巻五号(大正五)はマルサスおよび人口論に関する書目を截せた。和書についても割合に密で解説がついたりにしているが、例によつてマルサス文献は経済理論に関するものが除外されてものたりない。南亮三郎氏が戦前、戦後におくつた「人口論発達史」(昭和一一)、「日本における人口問題研究の展望(1)」(昭和三〇)は親切懇ろな解説がされており出色である。しかし前者は蒐集の時期が昭和初期一〇年に限られており、さらに「本稿は人口学説に関する研究を主題としているので、ひとしくマルサスの学説であつても、経済学説に関する研究文献については内容にふれない」と筆者が断つておりとの不整合がある。後者は日本ユネスコ国内委員の委嘱で成つたもので、マル

サス研究紹介にもかかりの紙幅が割かれており、戦前との研究系譜のつらなりにまで触れられている。しかし残念にも経済理論よりするマルサス研究には充分に筆が伸びていないので、ステュアート・マルサス・ケインズの視角よりする田添京二氏のマルサス論や戦前からのふるい研究歴をもつ森耕二郎、堀経夫氏らのマルサス論やするどい現代実践的視角からする対照的な遊部久蔵氏と平瀬己之吉氏のマルサス評論などが無視されている。平凡社「人口大事典」(昭和三二)はマルサスについても主要参考文献を附し解説をおこなつてはいるが、和書については相不変不備でありあまり参考にはならない。

(2) 「ジョン・ステュアート・ミル文録目録」(関西大学経済論集第六巻七号)。「わが国におけるマックス・ウェーバーの文献目録」(同論集第六巻二号)。

〔一〕

三代にわたるマルサス研究の文献を通観すると、人口問題にかぎらずひろく日本社会の社会経済構造が、さらに人口思想にかぎらずひろく日本の観念構造がマルサス学の受容と政策化の態様となつて投影されているの気がせられる。わが国の敗戦にいたるまでの諸思想を体制内的なものと体制外の反体制的なものとに二大別すると、体制内的イデオロギーの屈強のもの

として現代日本史上をマルサス山脈が縦走しているのをみいだすのである。つまり、体制内の最右翼に位置しわゆる「家族国家観」によつて不断に代位補強されながら国家政策につかえてきたのがマルサス山脈であり、昭和人口論争においてみられたように反体制的思想——マルクス主義の側がとくに尖鋭にとくに精力的にマルサス批判を展開したのも当然といえよう。このことは、わが国で受容されたマルサス説が人口問題の恰好の理論的解毒剤としてつかわれてきたこと、さらにわが国人口問題が中進国に特有な半封建制と高度資本主義制との二重の矛盾を集約してあらわれ、人口問題がもろもろの社会問題の鏡のような役割をはたしたと、だから人口問題の政策的処理をめぐつてイデオロギー上理論上の対立が極度に尖鋭化したこと、をいみしている。したがつて日本社会の構造上および国家観上の大きな変動がおきたばあい、それらは人口思想や人口政策上の転換として凝集してしめされる。このことは、明治いごの日本現代史をあらゆる面での構造変動という点で劃期するとそれは敗戦を転形期として前後に二分されると思うのであるが、この変動をきわめて鋭角的にしめたのは、刑法の墮胎罪にたいする厳罰と警察行政上における峻烈な産児制限運動にたいする禁圧措置としめされた「生めよ殖えよ」——人口膨脹主義の世界でもつとも精力的な家族計画の国策をもつた人口制限政策への戦後転換であり、人口主義者の人口制限論者への転向であつたことをおもつと諒解される。人口問題、人口政策、人口思想

わが国のマルサス研究史(市原)

はとくに中進国日本の社会経済の変動や発展をクリエイティブカルにしめすものとしてあらわれ、人口政策が経済社会の国家政策の展開や転化の集中的表現としてあらわれるとすれば、経済社会や経済政策の資本主義的循環性は、他方、人口問題や人口政策の循環性としてもしめされることになるのは当然であろう。ケネーの「経済表」から「循環理論の促進者マルクス」にいたるまでの「現代経済生活の根本事実としての循環性」の理論を考察し、この「循環理論」を「明治元年以降に於ける日本の経済的發展の特殊的性質」に適用した福田徳三氏の「経済生活と経済政策の循環性」⁽¹⁾なる論文に多くをゆずらねばならないが、わたくしもまたこの「経済生活と経済政策の循環性」に対応した、日本における人口問題と人口政策の循環性を別途に考究したいと考えている。とりあえず以上のような視点から敗戦にいたる日本近代史をつぎのように六期に区分し、各期にわけてマルサス研究史を素描することにしてしよう。

第一期。明治一年から明治二十二年の絶対主義の基礎確立にいたるまでの、徳川純粹封建体制から絶対主義体制確立までの過渡期で、封建的家臣団の解体や本源的蓄積の進行にとともに過渡的な人口問題の時期といえる。

第二期。明治二十三年から同二十七年八年日清戦争にいたる、日本資本主義最初の恐慌と米騒動とはじまり、移植民論が昂唱され、やがて戦争にいたるまでの時期。

第三期。明治二九・三〇年の戦後不況への突入と米騒動には

じまり、明治三十七・八年の日露戦争にいたる、帝国主義的
 気運の盛行とそれが戦争に収斂していく時期。

第四期。明治三十九年戦後の端緒的な農業危機にはじまり大
 正六年世界大戦期にいたる時期。

第五期。大正全般的危機がはじまり（米騒動を起点とする）、
 戦後恐慌、金融恐慌、大恐慌におちこむことになり、人口・
 食料問題とオーヴァー・ラップしてはじめて人口・失業問題
 があらわれ、これらが満洲事変いこの国家独占資本主義への
 傾向が昭和八年の産業組合五ヶ年計画や日鉄成立、救農イン
 フレによる農業恐慌からの脱出等、一步前進を劃することに
 よつて緩和をみるまでの時期。

第六期。農業恐慌から脱出した特殊な不景気局面がまたまた
 東北兇作にみまわれ、国家独占資本主義的貿易統制がはじま
 り、独占資本の政党連合―再建運動がはいえ軍財抱合へふみ
 きた昭和九年にはじまり、昭和十二年に本格的に戦時国家
 独占資本主義に突入したまゝ軍需動員によつていちおう過剩
 人口を解消し、「人口資源」としての「生めよ殖えよ」政策
 に狂奔、やがて敗戦にいたるまでの時期。

以上、くどくどしくマルサス研究史の方法ともいうべき問題
 視角や時期区分やらを述べたが、以下に各期にわかつて基礎構
 造と研究主体との対応関係や研究系譜について覚え書きをしる
 してゆきたい。

★

★

★

まづ第一期であるが、この時期の前期には徳川純粹封建体制
 からうけついで相対的過剩人口が封建的家臣団の解体にともな
 い老人大化し、西欧社会に比較して多数を養いつゝあつた消費人
 口の再編は、⁽²⁾明治二年にいちはやく民部省達をして国内の部分
 的過剩人口を認めさせている。さらに明治九年の評論新聞で元
 野助之郎はマルサス説の日本さいしよの紹介とともに一種の人
 口過剩論を展開していた。⁽³⁾翌十年に大島貞益は福沢ら国富論派
 自由主義者の一人としてマルサス説の本格的紹介をおこない斯
 説の本邦導入の先駆となつた。日本人じしんの筆によるマルサ
 ス説の導入として、日本のスミス田口卯吉の主宰する「東京経
 済雑誌」が明治一三年以降に再々おこなつた斯説の解説があげ
 られるが、明治二〇年にはいると平沼淑郎のようにマルサス説
 を全面的に容認するとともに、マルサス説のマルサス死後のい
 わゆる第二期発展をしめす賃銀基金説を定式化して主張する論
 者もあらわれている。斯説の精力的導入の背景として、本源的
 蓄積の進行とそれにとまらぬ農民の階級分解の激化―自由民
 権運動の昂揚にもとづく階級対立のふかまりがあつたのであ
 り、講壇社会学者有賀長雄は福島事件の激発・東洋社会党創立
 の翌年に「次第に貧窮者の人口増加するに従い、其勢力も漸々
 増加して富者との均衡一旦破るゝ時は如何なる變動に至るやも
 計られ」ないのを憂へ、「無暗に主義を立て、曰く何党、曰く
 何派と称し夢中に奔走するの輩」を罵倒していた。ところで輸
 入マルサス説は西欧のマルサス批判や否定もあわせ扱つてい

て、それらはマルサス説批判をふくむ欧米の著書の形で、また日本人じしんの筆になる経済学書や小時論の形でさまざまにマルサス説が誤謬であることが紹介され指摘された。第一期においていちばやくマルサス説の大意とともにそれにたいする批判の諸型がほとんど紹介され出揃つたといえよう。ただし批判の型のすべてはマルサスの原意をゆがめて批判をくわえた俗流の域を出なかつた。たとえばアメリカのバステリア型の俗流経済学者 Amasa Walker, *The Science of Wealth*, 1866. の永峰秀樹訳のごとき——あるいは日本人じしんがものした松木直巳纂述「経済新論」（明治一七）のごとき。前者は原著者によれば、マルサス流の人口理論はいわゆる収獲遞減法則と人口の恒常的増加とにその基礎を置いているが、この二つの論拠はいづれも誤りで収獲遞減法則は生産技術を一定としたうえで成立するが技術は不断に進むから結局は遞増するのでありマルサス説はあやまりである、というのである。後者は、人間以外の生物の増加がマルサスが説いたようなものでないことは最近の生物学がこれをあきらかにしており、また人間についてもその増加がマルサス説のごとくでないことは人口統計学の發達がこれを証明している、というのである。いづれも俗流のマルサス批判で、後述するように、前者は河上肇によつて後者は大西猪之介によつてその屈折—俗流解釈がただされたのであるが、その後も後者に代表される統計的マルサス批判はあとを絶たず今日にいたるまで影響力をもちつづけている。この種の屈折—俗流

わが国のマルサス研究史（市原）

化されたマルサス説がいきなり政策論にあてはめられ常識化された結果、たんに移入理論としてではなく、日本絶対主義の確立を基礎として明治二十年代に敷設されていつた軽工業中心の資本主義の再生産軌道とそれにもとづくさいしよの矛盾の爆發——恐慌を契機として移植民論が内部的に自生してきたとき、この俗流マルサス説はただちに実践化され政策論として大規模に利用されていった。

第二期についてみよう。明治憲法を發布し絶対主義政府の確立を祝した翌明治二三年に早激的に上からつくりだされた日本資本主義と半封建的農業との矛盾がはやくもあらわれさいしよの資本主義的恐慌におちいるや、いたるところに米騒動がおき飢民は大都市に不穩の氣をただよわせた。二四年に政府系の「東京日々新聞」は「我國の人口が土地に過剩し社会上の生存競争の最も困難の域に進みたるを知るべし」とし、「故にさしあたり植民地を拡張するか人口制限法を立てるか、とにかく其急を救ふに非ざれば社会党、共産党の如きもの踵を接するに至るやも計られずとある経済家は眉をひそめて語りたり」と書いていた。マイエットの「日本農民の疲弊及其の救済策」はこの米騒動に衝撃をうけて書かれたものである。本土における貧困打開策としての北海道移住論はマイエットにあつては人口論的操作とむすびついたにすぎなかつたが、日本資本主義の發展はそれ自身の資本主義的植民地をもとめて得られず、北海道だけが近代的意味をもつ植民地としてとりあげられてゆき、ここに二三

年いご北海道拓植論とマルサス説とは結合をとげていつた。二五年には政府反対党の自由党総裁板垣退助が「植民論」を書き、「日本の人口過剰になるは近きにあり今において植民の拡張は急務であるのみならず、日本が世界富強の各国と競争するには海権と商権とを収攬せねばならず、そのためにも大いに植民の必要あり」と叫んで政府を鞭撻したが、「植民協会」や「東邦協会」の設立があいつぎ海権・商権伸張論が盛行し、もはや北海道だけでは不十分だから他に植民をもとむべきであるという広義の移植民論が勢を占めてこれとマルサスの絶対的過剰人口論とが結合せしめられていつた。かくて多少の批判があつたにせよ滔々として普及し俗流化してゆき政策論にまで成熟していつたマルサス説は、その極北として日清戦争にいたつて、徳富猪一郎の平民主義からの転向をしめす記念作品——「大日本膨脹論（明治二七）」において、スペンサーの社会有機体説を「家族国家観」（石田雄氏）で色あげした、いわゆる「日勝清敗」の超国家主義とむすびつけられて「観念的」人口主義を基礎づけていた。

以上、第一・二期にわたつてマルサス説導入の傾向と現実の人口問題との対応とをおよそみてきたのであるが、ここで気がつく第一のことは純乎たる一般的人口理論の埒内でふかめられたマルサス説は乏しく、たいていは国富論派を先頭にした西欧経済学書導入にともなわれその一部分として翻譯され導入されたものにすぎず、マルサス説が単独に需要された場合は乏し

かつたということである。ところが移植入経済学書の一章一節として翻譯され批判されもしたマルサス説は明治初年の早激的な日本社会の実践場裡に投げこまれるとたちまち階級対立・政治論争の渦中に生き、第一期の後半期——明治十年代からそれまで文明開化の先頭を切つていた姿勢が暗転した明治国家の薬籠中のものとなり、いたるところマルサスの名と所説とが俗流化されたまま利用されるといつた状態になつた。そこでは異句同音に人口と食物との直接対比から出発し絶対的過剰人口を容認して論をすすめる移植民論や領土膨脹論を帰結する結果、日本人口論のもつとも権威あり信憑するに足る典拠とされたマルサス説が厳密にいうと原理論のうえでも演繹的政策論のうえでも本来のマルサス説とはかなり異なりばあいによつては全然似而非なものであつた。たとえばマルサスにおいては「人口増加力」は「食物増加力」よりも大きいがしかし後者の実現は前者によつて規制せられるから「人口増加」は食物の限界にとどまらざるをえない、というのであつた。つまり日本人口論は食物よりも大なる「人口増加」を主張したが、マルサスはこういうものは原則的に否定したのである。——食物よりも大きい「増加力」がこれと等しい「増加」とならざるをえないこと、換言すると日本人人口論のいうようなヨリ大きい「増加」を否定することが、マルサス説の核心であつた。同時にまたマルサスにあつては移植民は人口過剰にたいする根本対策としては無価値なものである。それはたんに問題の移転であつて根本解決ではない、とい

う。ところが日本人口論においては、移植民こそが人口過剰の最大屈強の救済策である。だから原理論のうえでも政策論のうえでも、日本人口論はマルサス説とは似而非なものであつたといえよう。「マルクスは、ドイツについて、経済学はドイツから見て『外国科学』であると言つた。このことは、日本にもあてはまるだろうか？私の見るところでは、日本にとつては、経済学は『外国科学』ではなかつた。それは外国俗流経済学であつた。」と大塚金之助氏は覚え書いたが、このような形の外国俗流経済学にもなわれて舶来した人口論もまた外国俗流人口論であり、外国俗流マルサス説であつた、というのほかない。

(1) 福田徳三「厚生経済学(上)」二四五ページ以下。人口問題をささえた経済社会の循環性が国家独占資本主義の段階にはいつてもいぜん作用しているかどうかは国家の統制機能の評価をめぐつてさいきんの問題でもある。この点にかんしわたくしは、ヤ・ベツズネルの、「私は日本でももう長年のあいだ循環的恐慌がなかつたにもかかわらず、やはり日本の発展は循環的な性格をもつている——戦争と戦後復興の結果ゆがめられてはいるが——と思います。……国家の政策といえども循環的な発展を臆しえないことはもちろんです。……私たちは経済にたいする経済統制機構の影響を否定しようとは全く考えません。この機構は上向運動にブレーキをかける——たとえば日本のデフレ政策のように——こともできれば、それに拍車をかけるということ

もできません。しかし、それは、平和時においては、運動の循環的な性質をなくすることはできません。」という意見(中央公論三二年七月「現代世界に貧困化に進行するか」九〇—九二ページ)に賛成である。ただわたくしが期別にした明治いごの人口問題史の循環性(人口問題—移植民—領土侵略—戦争)そのものの考察は別稿にゆづらねばならない。

(2) 当時の日本が西欧に類をみない消費人口を養つていたことは、フランス革命のとき、貴族十四万七千人、僧侶十三万人であつたのに、明治維新の際は士族一五四万八千人、僧尼神官十四万六千人の多きにたつたことからわかるであらう。——平野義太郎「日本資本主義社会の機構」——ページをみよ。

(3) 堀経夫「明治初期に於けるマルサス人口論の紹介」(「経済学断片」所収)二三七ページ以下をみよ。

(4) 大塚金之助「経済思想史(要領)」(日本資本主義発達史講座所収)二〇ページ。

(二)

日清戦後のほぼ十年間に日本資本主義はいちおう体制的に確立し、その基礎となつて制約した農村地主制は、地主が経営者的要素を最後のにうしない寄生地主として定着することによつて

いよいよ強大化し、この都市と農村との相互規定的發展をつうじて、福田氏のいわゆる「經濟生活と經濟政策との循環性」は日露戦争にいたる一の循環期を結了する。この日露戦後にはじまる循環の始発は三十年にはじまる經濟恐慌、とくに同年の米騒動に止められた、確立した半封建的農村の激發裝置の再充填である。第二期の循環期の發展形態とパラレルな人口・移民問題の登場は前期に数倍する移民数の躍進となつたのであるが、しかも明治四〇年日米紳士協定・日加協定に止められた日本移民の排斥運動は移民問題を帝國主義諸國間の國際緊張にまでひろげた。同時に列強の帝國主義的な極東分割戦——商業的自由競争のみでなく資本の輸出、鉱山や鐵道の利権の独占、領土の租借等のための死斗——は三國干渉關係をつうじてふかまり、帝國主義の機運は日本の朝野に充溢したのであつた。やがて三七・八年の戦後に突入した。移植民問題をめぐつて、また帝國主義的膨脹の是非をめぐつて、マルサス説は前期と同様に、いやそれ以上にするべく政策舞台にひきあげられて、金井延(七博士開戦建白)、河上肇(日本尊農論)、酒匂常明(農業保護論)という一連の絶対主義・ウグナー主義者や農林官僚陣営と、さらに幸徳秋水(帝國主義批判)、北一輝——安部磯雄(金井やマルサス説——賃銀基金説批判)、堺利彦——森近運平(移植民論批判)という社会主義の陣営、大島貞益(植民論批判)、田口卯吉——堀江帰一(自由貿易論)、福田徳三(飢饉農村調査——農村資本主義化論)という一連の生産力論の陣営とに三分され、それぞ

れのイデオロギーによつて濾過されつつ受容されていつた。マルサス説に関するかぎりの主なものをあげると、まづ第一の絶対主義陣営としては、横井時敬に推されて講壇ウグナー主義者となつた河上が明治三五年に「本邦における人口増殖及び男女数の比例に関する所感」をかつて、マルサスの「妨げ」(Crack)の理論をはじめて日本の人口統計にかかわらせながら将来人口の増加テンポを推計し、絶対主義的ポピュレーションニズムを支持したのが注目される。ここで河上は、「一年に五十万を、十年に五〇〇万を、二十年間に千万を増加する」日本人の増殖傾向を、「妨げ」の具体的諸条件を統計的に処理しつつ将来も減退をみないであろうと推計し、結局は、「帝國の範圍は他國を征服することに依り、或は植民地を獲得することに於て大いに拡張され得べきを忘るべからず」と帝國主義を支持していた。後日ふたたび日露戦争のさなか——明治三十八年に「日本尊農論」をかつて農商工の闢立共進を主張し、とくに「人口増殖の關係より農業保全の必要を論」じ、軍事的・封建的帝國主義のポピュレーションニズムを代弁した。とくに所論中に「マルサス説を攻撃し斯説を「邦家の大患」ときめつけた。第二の生産力説の陣営としては、このときすでに日本のリストになりきつていた大島やスミス、ミルの植民地論を手掛りに藩閥政府の北海道拓殖や屯田兵制度を批判し台湾統治策を難じ自由放任論をとなえた日本のスミス田口のもの注目される。大島はリストの生産力説に拠つてわが國の人口はなお過剰でないとして植

民論に反対していたが（明治二四年「植民論に就て」、明治三十三年の「経済纂論」中の第二十一編「人口論の概要」においてリストの経済発展段階説の見地からマルサス批判をこころみている。田口は明治三十五年に「東京経済雑誌」に「人口論」を連載しスペンサーの生物界均衡の思想とリカードウの商工業「貿易立国主義に拠つてマルサスのとくに農業主義を批判しているが、統計的マルサス批判の俗流を脱していない。ところで第三の社会主義陣営は、「日本尊農論」の河上や対露開戦建白の七博士の一人金井——彼は明治二十六年に「貧民存在の理由」や貧民救済策」をかってマルサス・ゴドウィン論争を吟味しワグナー主義者としてマルサスを狙上りにのせていたが——が人口増加の擁護を人口論からひきだされた結論としてではなくむしろその大前提とし有限な資料と土地とを拡充して遂に過剰人口と貧困とを解決せよという移植民論や帝国主義膨脹論を主張していたかぎり、とうぜんマルサス説をば反帝国主義反移植民論の立場から批判する必要があつた。だから安部磯雄は明治三十三年の社会主義研究会でヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」Progress and Poverty, 1880. を紹介し賃銀基金説とともにマルサス説をも批判している。また安部にまなんだ北一輝は明治三九年の「国体論及び純正社会主義」で人口論を展開、マルサスの級数概念をその富豪階級の階級性とともに難詰し日本社会政策学派とりわけ金井が社会主義に對抗している最後の城砦がマルサス説であることを糾明している。さらに明治三十七年

西川光治郎は週刊平民新聞に載せた「移民乎捨民乎」で絶対的過剰人口論よりする移植民論をそれは棄民論であると批判し、田添鉄二「経済進化論」（明治三七）は第三章「自然界の征服——其九「自殺、他殺、死亡率」」でマルサス説にたいしイデオロギー批判をくわえているが内在性はない。以上、社会主義者のマルサス批判をみると、マルサス説自体が「俗流外国マルサス説」の盛行にわざわざいされて適確にとらえられていず、一方自らの拠りどころであるマルクスの相対的過剰人口理論の解釈が俗流社会主義という時代的な制約のため浅く適確でなかつたため説得力に乏しい憾みがあつた。

つぎの第四期は日露戦後——四〇年の反動不況の襲来、四一年の恐慌とオーヴァラップする端緒的な農業危機の開始によつて決定づけられた。寄生地主制の明治四十年代の完成とこれとパラレルにすんだ金融資本の端緒的成立を基盤にいよいよふかまつた農工間の不均等発展によつて人口・食糧問題や農民向都・離農問題、さらに移植民問題がやつぎばやに提起されていった。日本移民の出稼主義に端をもつ米加の移民排斥問題や農業危機の端緒開始にともなう中小農崩落の実態は絶対主義者に危機感をいだかせた。日本社会政策学会も明治四二年には移民問題を大正三年には小農保護問題を討議した。しかし前期の帝国主義批判の書がしめすようにアジアの憲兵として自立化した日本帝国主義の諸矛盾は拡大再生産されるばかりで「大正政変」なる国民運動へと顕現していったが、やがて大正五年の吉

野作造の民本主義宣言を契機に津波のように大正後期のデモクラシー運動へと集約されていった。大正六年は大戦という好条件にめぐまれた日本資本主義で本格的に独占資本主義に転化生長できた物的条件——大出超・大好況のさいこの年であり、しかも世界資本主義はこの年にロシア革命をむかえていわゆる全般的危機段階にはいりこんでいた。農業の端緒的危機にはじまり大正六年にいたる第四期以上に概観したような矛盾の拡大再生産期であるからには、この期の人口問題が帝國主義論の移植民論の、小農保護論の、貧乏—生存権論の、それぞれの社会問題的視角からとりあげられたのは当然で、マルサス説もまた大西猪之介によつて帝國主義論の視角から、河田嗣郎によつて移民問題の視野から、河上肇によつて「貧困学」の視点から、福田徳三によつて生存権論の方向からそれぞれとりあげられていった。まづ大西についていえば、彼は処女作「帝國主義論」を明治四二年に姉姉篇「社会主義論」を翌四十四年にかき、ついで大正二年の経済学大辞典（同文館）第五卷所収「人口論」（のちの改題）をかいてゐる。こゝで大西は斬新にも、「資本論」Das Kapital, Bd. I, 3. Aufl., Hamburg, 1883. やエンゲルスの「経済学批判大綱」Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie, in den "Deutsche-französischen Jahrbüchern" hrsg. von Arnold Ruge und K. Marx, I and 2. Lfg. Paris, 1844. やカウツキーの「社会の進歩にたいする民族増加の影響」Der Einfluss der Volksvermehrung auf den Fortschritt der

Geellschaft, Wien 1880. を引用しつつ人口論をめぐるマルサスとマルクスとの対立論を展開し、俗流型のマルサス批判——統計的マルサス批判や生物学的マルサス批判からマルサスを防衛し、日本歴史学派の代表的経済学者福田徳三、津村秀松氏すらブレンターノ一派の鑿みにならつて統計的マルサス批判の俗流を脱していないことを述べ、つぎのように適確なマルサス説の原理解釈をおこなつてゐる。——「夫れマルサスの説には統計上の根拠なし。マルサスは云ふ『もし何等の障害をも被らざる時には人口は二十五年毎に二倍す可し』。見よ二十五年倍加説には這般の条件の明かに附加せらるるなり。然るに人口の増殖が何等の障害をも被らざる状態と云ふは之を想像するだに難し。況んや其実現をや。……而してマルサスの所謂る予防的制限なるものが到底統計的に数字を以て立証すべからざる制限たるのみならず、其積極的制限と雖も普通以上に高まる死亡率を指すものなるが故に、而して幾許迄が何等の障害なき場合の正当なる死亡率にして幾許以上が所謂る積極的制限に属すべき死亡率なるかは之を統計的に確定し得ざるものなるが故に、換言せば今日吾人の有する統計は総て既に積極的予防的制限の作用を受けたる数字を示すのみなるが故に、統計上の根拠に依つてマルサス説を打破せむと努むるが如きは恰も木に據て魚を求めむとするに異ならず。短言せば何等の制限なかりせば人口は二十五年にして倍加す可してふマルサス説は、吾人に於て其統計上の真偽を判断する能はざる、一個の空なる事雲の如き断定な

り。……内に何等の統計的根拠なし。故に又内に何等の統計的誤謬なし。想像は人の自由なり、もし人ありてマルサスは此の如しと想像す、但我は然らずと想像すと云へば討論は茲に至つて終結す。何すれば統計上の誤謬を云々するを得む⁽²⁾。と。結局マルサスは、人口「増加力」は食物「増加力」よりも大であるということを論証したのではなく主張したにすぎないとの大西のこの確認こそ、河上の「妨げ」の理論の統計的应用やこの時期にいちおう確立をみた日本歴史派経済学の代表者——福田——津村の俗流的マルサス解釈の弊を断ちきつたもので、こゝにおいてマルサス説を批判すべき核心の所在があきらかになつたといえよう。前期からこの期にかけて大塚金之助氏のいわゆる「教授型俗流経済学の成熟」⁽³⁾があり、多く出版された経済原論または経済学史のほとんどが、人口論を生産要素論中に摂り、あるいはキヤナン流に人口論を労働論から離して生産要素論中の土地の項に移し⁽⁴⁾いづれもマルサス説に多少の差はあれ筆をとどめているが、しかもこれらのほとんどすべてがまさしく「俗流経済学」中に俗流マルサス説を説いていたことをおもつと、大西のマルサス研究は彼が理論経済学の出発点を人口論を置くという破天荒なプランを提出し経済学徒となることが同時に人口学徒になることをいみするといふ特異な学問出立をしめたことゝともに注目にあたいたといえよう。氏が科学と政策との新カント派的な区別論に立つてマルサスの人口政策論が如何に誤れりとするも科学としての人口論はいささかも破られず、「今日敵

然として真理」たるゆえんを極力主張したこともさらに止目しておいてよい。

つきに河田についていえば、彼はこの期には京都大学の同僚河上とともにその言論が家族国家観に接触したので文部省から圧迫されたほどの急進主義者であつたが、社会政策学会の第三回大会の「人口問題ト社会政策トノ關係」と題する演述では、マルサス説と唯物史観の問題にまで降り立つて後者の側から絶対的過剰人口論批判をおこなつた。大西の先駆的なマルサス研究や彼のマルサスとマルクスとの誤植論争や河田のこのマルクス・アゲインスト・マルサス論をみつめると、俗流マルサス説と俗流マルクス説とがオーヴァラップした時代の帷が先人によつておろされつゝあるのがわかる。河上についていうと、この期には「嘗つて鎖國的農業論者たりし著者はかくして帝國主義的農業論者となりしもの也」⁽⁶⁾との自叙であきらかなとおり、日本尊農論時代の農業保全⁽⁵⁾経済的鎖國主義の主張から脱皮してリアリストとしての階級対立の現実認識にミル⁽⁷⁾ジェウオンスの快樂主義的労働観や功利主義の撰取にともなう経済理想論の新展開をくわえ、彼本来の求道の関心からする唯物史観とマルサス史観との交錯という史観的視角から、さらに農業危機の開始や産業資本確立にともなう階級的矛盾の処方箋をかくための貧困学の探求という視点から、マルサス説にとりくんだのである。すなわち、河上は、利他と利己という生涯をつらぬく求道の関心もあつて、明治三十八年にセーリグマン「歴史の経済的

説明「新史観」を訳刊していたが、同四十四年、四十五年における関一氏との唯物史観論争には、史観的視点よりするマルサス論がふくまれていた。彼は明治四十三年に国家学会雑誌にウオルトマン Ludwig Wolmann, *Der historische Materialismus*, 1900. の部分抄訳をかかっているが、その所論はダーウイン説は生物進化の二大要因として資料の競争と繁殖の競争とを認めているが、マルクスはその一つなる食料の競争つまり生存欲だけをもつて人類発展の根本要因と考へた、ところがモルガンが出て繁殖の競争つまり生殖の競争を重視したので、マルクスも自らの唯物史観表式をモルガン説で補充せんとしていたが成しえず歿した、エンゲルスはその遺業をうけてマルクスのそれまでの唯物史観の公式を訂正し「家族・私有財産・国家の起源」(一八八四)その他で「生の生産および再生産」すなわち生存欲と繁殖欲とをもつて人類進化の二大要因と考へるにいたつた、というのである。河上は関氏との唯物史観論争においてもセーリグマン流の唯物史観の経済史観的俗流解釈やらウォルトマン流のその社会ダーウインニズムの屈折解釈に拠つており(この点は初期社会主義者の理論的的高峰といわれた幸徳ですらおかした史観上の誤謬と軌を一にしていた)、唯物的世界と唯心的世界とに二分する二元論に立ちながら、マルサスは色食両欲という生物の二大本能に立つて歴史を自然法則的にとらえこれがダーウインの食料競争と繁殖競争とにもとづく生物進化の把握に発展しこれがマルクス・エンゲルスに影響をあたえて生

の生産と再生産とを歴史発展の動力因とみる見解にたどりつかせた、そして唯物史観に関するかぎり自分も唯物論者にならざるを得ないが、一方に唯心的世界に関していえばそれは自然法則の作用をうけない自由と創造の別世界で、こゝでは生存競争も階級斗争もありえない、というのが論点なのである。大正四年から五年にかけての河上のマルサス研究の所産とみられるマルサス説に関する三論文(経済論叢第一巻二号「マルサス人口論初版以下各版の差異」、太陽第二十二巻四号「マルサスの人口論」、経済論叢第二巻五号「マルサス人口論要領」)は、マルサスは人口論の初版において唯物的自然法則につながれた理性なき人をとらえたが、第二版においては「人為的制限」*partial restraint*なるものを新発見し唯心的楽観論に変調した。つまり二版以後において、物質の世界をみて目的の世界をみず因果の世界をみて意識の世界をみず他動的運動の世界をみて自発的創造の世界をみなかつたマルサスは、人間の意識と理性の働きを認めた結果、人間を一定の自然法則のもとに総括することの不可能なことを認めるにいたつたのであり、そのために人口論は科学的精密さをもつようになつたが、初版における斬新の奇を失うことになつた、とした。「マルサス人口論要領」で河上は、マルサスを「英国における貧の哲学の祖先」であり「貧困学創始の一大天才」であるとして、マルサス研究のいまひとつの視点が貧困問題にあることを示唆しているが、大正五年に大阪朝日に連載した「貧乏物語」は河上の貧困学のいちおうの決

算をしめしていた。貧乏の根源はマルサスのいうように、財貨の生産力と人口の繁殖力との落差にあるのではない。営業者の生産は有効需要力によつて左右されるが、この需要力は富者の要求によつて牛耳られ貧者の必需品は割愛されてゆき富者の奢侈品あての生産に圧倒される。だから奢侈が全廢されると貧困は根治するのである、というのである。イギリスにおけるマルサス研究の權威キヤナンの需要の経済学にまなんで需要こそ生産を決定するから生産問題として貧困問題をとらねばならない、という発想に立つたわけであるが、その処方マルサスやケインズの「非生産的消費」にもとめず、逆にラスキン―スマート一派の人道経済学の精神に做つて富者の自制とロツンヤ―流の倫理学と経済学との混淆——「経済と道德との一致」なる洪沢米一宗の境地にもとめたのであつて、人心改造と経済改造の要という二元論はこゝでもつらぬかれていた。さらにこの期の農業危機の開始、農業保護問題や滿韓移民集中論をめぐる移植民是非論の登場は、横井時敬、福田徳三、堀光龍らめぐるつて農業における收穫遞減法則の作用を保守的老農主義の立場で否定するか正統派経済学の系論内でその作用を承認するか（たとえばリスト流の農商工併進論をリカードウ学派の收穫遞減法則に立つた商工業立国論のなかに吸収したブレンターノ流に考へた福田をみよ）で意見の対立を招来していたが、河上はこの時論的照明をあてられた收穫遞減法則をマルサス説との関連で吟味し、「収益遞減法則ノ発見及ビ改造」（『経済論叢』

二第卷一号）で人口法則と收穫遞減法則とは原理的に結合していないというキヤナンの研究に拠つて、両者の結合をいいマルサス説をこの視角から批判する俗説にとどめをさした。

さて最後に日本のブレンターノ福田氏のばあひはどうか。彼は明治三五年「経済世界」所載の「企業・労働及社会問題」でミスの高質銀論に開眼したことをいつているが、第四期の移民問題や農業保護問題に関しては收穫遞増と富裕化の法則をもつ商工業立国によつて、日本の過剰人口を充分扶養しようと確信し移植民や農業保護にたいし否定的見解をつらぬき、大正五年には「生存権の社会政策」を民本主義の経済理論として提唱したが——金井延によつて支配された日本社会政策学会の第一期は終了した、こゝに生存権の社会政策の実施さるる第二期にはいる、という新段階の宣言とともに——、これはアントン・メンガーの「法律社会主義」と日本自由法学派の牧野英一氏の「法律の社会化」論に拠つたものである。大正五年に京都帝国大学法科雑誌「経済論叢」第二巻五号が載せた「マルサス生誕一五〇年記念号」で福田は「マルサス人口論出版当時ノ反対論者——特ニ生存権論者」をかき、生存権を否定したマルサスを生存権を肯定する社会政策家と対立させ、以後マルサス研究の一視角となつた人口法則と生存権との問題論を提供した。彼は両者の対立を、マルサス人口論は一個の自然法則として厳乎として作用している。しかし彼が初版の修正として「道德的抑制」をもちこんだようにその作用の歩度をゆるめる余地は大いに残

されている。この余地に立つて社会政策を行うのであつて両者は最後まで対立するものではない、として折衷させている。さらに彼はマルサス研究の先駆大西にそのマルサス解釈のブレントナーノ流の俗流性を摘出されながらも経済学者マルサスについて早期に貴重な研究をおこなつてゐる。——大正一年七月号の「国民経済雑誌」第十三巻一号に載せた「価値の原因と尺度とに關するマルサスとリカルドとの論争」(余剰価値論梗概の一部)を書き、「マルサスは其人口論のみを以て余りに著聞せり、其原論其価値論は大なる光に掩はれたる小なる光なり。リカルドの原論中地代論と相並びて何人の眼にも触れ得べき場所にある彼が価値論のみ読まれ、捨てゝ顧みられざるマルサス原論中の価値論の読まれざる」ことを嘆じて、Labour expended が Labour commanded. かをめぐりリカルドとマルサスとの論争がスミスより分流した截然二個の対立であることを「余剰価値論」史のスミースリカードウ・マルクスという系列を視点にしてあきらかにしている。⁽¹⁰⁾

大正五年にマルサス生誕一五〇年記念の京都帝大での諸行事にたいし国家学会評議院長穂積重遠は祝辞をおくつたが、その一齣を引いてこの期の斯説研究の概括にかえておこう。すなわち、いう。「社会ニ関スル学、特ニ経済学ノ発達ニ貢献スル学者思想家人古今東西素ヨリ夥多ナリ、之カ誕生ヲ記念スル豈独リ『マルサス』其人ニ限ランヤ、而モ同会ガ其ノ特ニ、『マルサス』ヲ選ンデ其ノ挙ニ出デシ所以ノモノハ必ズヤ重大ナル理由

ノ存スルモノアラン」。さらにいう。「想フニ本邦経済学界ノ進歩ハ固ヨリ昔日ノ比ニアラズト雖モ尚ホ未ダ全ク翻譯時代ヲ脱セズ独创ノ研究トシテ見ルベキモノ未ダ甚ダ多カラズ、転ジテ本邦経済社会推移ノ跡ヲ窺フニ其ノ進歩ノ駭々タル実ニ驚クベキモノアリト雖モ猶十八世紀末葉ニ於ケル英国ノ事情ニ彷彿タルモノ之レナキニアラズ、人口問題社会問題ハ漸ク其重要ヲ加ヘ来リ之カ根本的解決ヲ要スルノ時期蓋シ遠キニアルザルベシ、此時ニ方リ……」と。こゝには古典派山脈がこの國に根づいたものとしては形成されず、翻譯時代を脱しない不毛の野にマルサス山脈が聳立した理由に触れられており、しかもマルサス・リカードウ段階の古典的対立が後進国日本になお妥当するものがあることがいわれている。米穀関稅撤廢や地租輕減問題をめぐる第四期の社会政策学会内の農業主義と商工業立國主義、ワグナー主義とブレントナーノ主義との対立がある歪みを受けとりながらも、日本における一種のリカードウ・マルサス論争であるといえないことはなからう。資本主義の本来的矛盾があらわれながらなお資本と土地所有との対立にオーヴァーラツプして前者の派生的矛盾を解決することなしには後者の基本矛盾も解決しえないという一点において、当年の日本の資本と土地所有との対立形態はなお古典資本主義におけるように、ステューアト・スミス段階における独占の排除、リカードウ・マルサス段階における資本の運動法則への地代的從属・地主國家にたいする「議會改革」をはたさず、いわんや「市民社会の國家形態

への総括「すつ完」してない、という重大な留保条件付き。
 なおアシュレー教授の監修にかゝる経済学古典第三冊として
 出た「第一版第二版対照マルサス人口論抄」の三上正毅訳が明
 治四十三年に出されたこともつけくわえておこう。

- (1) くわしくは別稿にゆづる。ひとまづ福田氏作製の、氏
 のいわゆる「日本経済の循環表」を参照されたい——「厚
 生経済学」(上)二八八〜九ページ。
 (2) 大西猪之介全集第四巻経済学研究七四〜五ページ。
 (3) 大塚前掲書、十一ページ。
 (4) 福田全集第一巻六八五ページ以下参照。
 (5) 大西全集第十巻五七一ページ以下。
 (6) 河上「経済と人生」一九七ページ。なお大西は「帝国
 主義論」につけた研究の葉で河上の(一)「日本尊農論」(明
 治三十八)(二)「日本農政学」(同三十九)(三)「農業保護策
 としての外米課税」同四一年の二著と一演述(社会政策学
 会論纂「関税問題と社会政策」二一六〜二三七ページ)と
 をあげ、「特に年月を示したるは博士の意見が帰納的真理
 の絶えず進化する以上に右の三書に於て進化せるが故也。
 二は一より三は二よりと著しく変遷す。」と述べ(全集第九
 巻五六四ページ)、さらに横井時敬の小論にふれ、「新渡戸
 博士隠れ河上博士叛いて、日本農民は唯横井博士にのみ味方
 を有す」(同上、五合ページ)と河上の思想的移行をあき
 らかにしている。

わが国のマルサス研究史(市原)

(7) E. Cannan, *Wealth, Chap. VI, The Controlling Power of Demand*, 1914.

(8) マルサスやケイインズは奢侈を非生産的消費を過少消費
 の対策としていたのだから、奢侈の禁絶をいう「貧乏物語」
 の河上はけつして大内兵衛氏のいうように「東洋のマルサ
 ス主義者」ではなく(大内、岩波文庫「貧物語」解説)、
 逆である。この大内氏の謬見がいぜんとして揖吉光造、大
 井正らの諸氏によつて踏襲されているのは残念である。

(9) E. Cannan, *Production and Distribution*, *The Economic Journal*, vol. II, 1892.

(10) なお堀経夫氏は波多野鼎氏の「正統学派の価値学説—
 価値学説史第一巻」(昭和三)を解題して、「著者(波多野
 氏のこと—註)が『アダム・スミスが発見したこの二つの
 価値原理—費消労働量と支配労働量—はスミスの二人の後
 継者によつて継承発展せしめられた。デヴィッド・リカード
 ウとトマス・ロバート・マルサスとがこれがある』といつ
 ていることも、今日では常識となつていなければならない
 として卓見であつた。蓋しマルサスの価値学説はその頃
 未だ殆んど問題とされていなかった」といわれるが(「本
 邦アダム・スミス文獻」一〇九ページ)、さうではない。
 それより大分はやく大正一年にすでに、福田は剰余価値論
 史研究の視角、スミソーリカードウ・マルクスなる視点か
 ら明瞭に二つの価値原理のスミスの統一とそれのマルサ

ス、リカードウ両者への両極分裂とそしてマルサスの価値論重視の要とを述べていたのである。

〔三〕

米騒動を契機に日本資本主義は全般的危機の体制にはいり、農業危機も本格化し前者の構造的危機の一環となつた。日本における資本蓄積・資本および生産の集中・集積におけるはなはだしい不均等性が相対的過剰人口をヨリ大量ならしめたにかゝわらず、それらは都市におけると農村におけるとを問はずもつばら潜在的・停滞的形態にとどまつていたが、大正九年を劃期として大衆的失業が顕在化するにいたつた。九年以前には大都市人口は総人口の増加分の三割近くを収容したにすぎなかつたが、以後十九年間にあつては総人口の増加分の優に七割五分をひきうけることとなり、九年以降は着実に出生率は低下していつた。多産亡國論が食糧自給体制の破綻に乗じてちらわれ、過剰人口論は常識となり、田中内閣時には一年一万移民論が真剣に叫ばれはじめた。しかしその後の植民地米の増産と輸入とによつて人口・食糧問題は一応解消したが、過小農の夥多存在にもとづく人口・土地問題、さらに戦後の頻発する工業恐慌によつて深刻化した人口・失業問題は解消しえないのみか、とくに後者は過剰資本と対応的な過剰人口の存在として大恐慌対策として採られた産業合理化の強行のため未曾有の失業量にたつ

した。この失業人口量は大正九年からこの昭和五年にいたる発生失業量の小田橋、美濃口両氏いづれの計算方法によるもほぼ二五〇万人前後であり、すくなくとも三〇〇〇万をこえる人口量が失業状態で沈澱・堆積したことは、帰農論や移植民論をさらに強化・盛行させ、日本経済研究会がおこなつた日本さいしよの綿密な失業調査はこれらの事態に触発されたものである。しかし昭和五年末の金輸出再禁止と同六年の満洲事変開始とを契機とする軍需インフレにもとづいて、同七年には恐慌局面をのがれ出ることができ、他方農業恐慌も同六年を底とし八年からは特殊な不景気局面に転出することができ、こゝにいわゆる「繁栄の孤島」が現出した。とくに農業恐慌の底から農村を脱出させるむかい水の作用をしたのは、「農村の子弟中小工業家の子弟でそれらから常にその苦難を訴えられて居、演習行動で親しくその生活情況を見ている」革新青年将校を動力とする満洲事変いごの軍部の国家改造運動やそれを支えた無数の農民請願運動の産物として、救農臨時議會（六十三議會）が昭和七年以後の三ヶ年計画の農村匡救事業案として通過・決定した時局匡救予算累計六億円の撒布による救農インフレであつた。これは上からの官僚コースではあつたが、国内市場をある程度開発し有効需要力を農村に撒布し人口・失業問題を緩和したのは否めない。昭和八年は軍需インフレを救農インフレとの吸引力で人口問題は緩和しつともいぜんとして人口過剰論が有力だつた時期で、中日事変の勃発にももう狂熱的な「生めよ殖えよ」の

ポピュレーションニズムへのいわば転換期だつたといえよう。⁽¹⁾

さて以上にみたような、第五期の社会経済事情はまづこの期のマルサス研究をどのように外側から決定づけたか。全般的危機の到来いごの階級対立の激化は日本社会政策学会の内部対立を深刻化し大正十三年にはついに解体してしまい三派に大きく分裂してしまつた。絶対主義と独占資本とは後者が農業危機を自らの危機に波及するものとして半封建的土地所有やその上部構造に部分的譲歩をもとめることとなり両者の矛盾はふかまるが、しかも大戦後恐慌の頻発は独占資本に「資本家武装必要論」を叫ばしめるにいたり、絶対主義と独占資本との大戦後のあたらしい条件のもとでの再結合はすんでいつた。このブロック勢力を一言にして「統治勢力」というなら、統治勢力に基本的に敵対したのが労働者、農民運動であることはいうまでもなく、さらにこの基本的な敵対両勢力の間に介在して両面作戦を採る中間政党（立憲同志会や革新クラブ）に自らの政綱をみいだした新旧中間階級の宥和勢力が進出していつた。社会政策学会の分裂した三派は当年の日本社会のこのような基本的派生的に對立する三階級勢力のそれぞれに脈絡してゆくのであり、社会主義の立場に立ちもはや社会政策の埒外に出た河上肇、大山郁夫、柳田民蔵、大塚金之助、大内兵衛氏などの左派、社会政策の孤灯をともして階級調和をいぜん呼びつづける上田貞次郎、矢田原忠雄、福田徳三、高野岩三郎、堀江帰一、小泉信三氏などの

わが国のマルサス研究史（市原）

自由主義的中间派（あるいは日本型生産力論者）、統治勢力と有形無形にむすびつきマルクス主義に戦斗的に反対し思想善導に力をつくした高田保馬、土方成美氏などの右派がこれらである。これらの三分裂とその後の帰趨に米騒動を契機とする全般的危機の到来がどのように大きな影をおとしているか。福田は米騒動に直面して生存権論を「極窮権」にまでたかめ、Paley, Moral and Political Philosophy, 1785 に拠り、「今日の財産擁護本位の私法哲学が極窮権の理論を容れ能はざることは元より論を待たず。然れども生活は理論よりも強く且つ鋭し。

……極窮権の实行を絶断するの道は唯一、曰く生存権の確立たる保障と第一義にする政治と法律の確立是れなり」とし、「此度の騷擾は畢竟するに、極窮権 Right of extremeneed の実行に外ならないのである。政治家共が政権の争奪を以て政治の一切万事多なりとして、有頂天になつて居るのみで、政治とは畢竟民の生存を保障し安全にするを第一とすることを、全然忘却したことに對する人民自衛権の発現と目す可きものである」とした。⁽⁴⁾ 独占資本は大正九年恐慌にいたるまでの二、三年は第一次大戦中の老大な戦時超過を物的基礎にして社会政策実施の若干の余裕をみせたのであるが、恐慌いごは宥和的な譲歩主義を撤回していたのであり、この日本社会政策不毛の季節に「実に自然の大則たる人口法則と社会實際の要求たる生産保障との間の矛盾……言い詰むれば自然と社会との矛盾」⁽⁶⁾をどのように解きどのように生存権の社会政策を主張しつづけたのか。この矛盾を

衝いたのが、ドイツ西南学派のリッケルトにふかく傾倒した左
右田喜一郎氏であり、彼は大正七年の「価値哲学より観たる生
存権論」⁽⁶⁾で生存権は福田博士の説く如く、三大社会の一として
基本的な社会権の要求であることは認めるが、その根本事実で
あるものを直ちに文化価値と認めることは「自然主義的論理の
極限超越を敢てする」ものである、「生存権は文化価値の実現
に対して社会的に且つ事実に最低根基を支ふると云ふ範圍及
び意義に於て初めて言葉の意味すらある。反之文化価値は形式
として、規範として、当為として……一個の Idee ですらある
」と価値哲学の立場から福田批判をおこなつた。これらの批判
にたいし、自然法則としての人口法則を左右することはできな
い、この意味でマルサスのように生存権は否定されなければな
らない、しかし彼が第二版以後に「道徳的抑制」論をもちこん
だように、自然法則の速度をゆるめる余地がある、この余地を
大きくするのが社会政策なのである、というのが福田理論なの
であり、(1)社会政策による救済、(2)商工業発展による人口扶養
力の増大(ブレントナーノ一派の考え方)によつて、自然法則の歩
度をゆるめられる、とした。日本資本主義の現実にたいし極度に
オプティミスティックなこの商工業立国論こそ、福田の人口主
義と生存権の社会政策の提唱とがあらゆる価値哲学からの批判
にもめげず同時主張された最大の理由なのである。自由法学の
牧野英一氏や勞働法学の末弘巖太郎氏は米騒動に進化的意義を
認め社会政策や勞働立法を政府に要求し概念法学や官僚法学に

いどみ、福田に生存権論争をいどんだ文化主義的自由主義者左
右田喜一郎やイギリス流の社会政策論者堀江帰一が米騒動につ
よい現実的関心を寄せそれ以後新カント派社会主義やフエビ
ン社会主義へ傾斜してゆく次第についてはすべて本稿の埒外で
あるから、黎明運動に参加した民本主義者と社会主義者との同
盟の問題とともに割愛する。

貧困学と唯物史観とをマルサスを材料にして齟齬していた河
上は、大正八年には革命主義者としてあらわれた。社会問題研
究誌上における中沢臨川との「唯物史観」論争や研究において
は、関一との論争時に自らがもつていた自由と必然との二元論
をなからば清算し、唯物史観は必然論であるが拱手傍観論ではな
い、正統派の個人主義経済学もミスが利己人をマルサスは人
間の性欲は強大で生存には食物が絶対必要なりという公準を前
提にした必然論ではないか、唯物史観だけを必然論であると攻
撃するのは妥当でなく、これまた人間は生きんとする意志を有
し物質的欲求はたえず増加し人口も増殖する、という前提、端
的(端的)という人間の生きんとする意志——いわゆる「生存権」を
前提にした社会組織の必然的進化論である、とした。同誌第十
二冊所収の「人道的理想と自然的法則との背反及び借調」およ
び同誌第二十四冊「勞働論を試みたる後の問答」においては、
いぜんとして心的改造と物的改造との二元論に立つて唯物史観
をとらえ、唯物史観とマルサスの人口史観とを自然必然論であ
るという公分母において、前者の必然論は生存権を前提にす

るから社会主義にいたり後者の必然論は生存権の否定を前提とするから資本主義の弁護論にいたつた、として、福田・左右田論争にみられる時代思潮としての生存権論——アンソン・メンガー流の法律社会主義の影響をうけながらも、もはや明確にマルクス・アゲインスト・マルサス論を展開するまでになつてゐる。これらの河上のマルサス論がスマス研究の成果と学説史のうえで噛み合つて述べられたのが、大正九年の「近世経済思想史論」であり、大正十二年の「資本主義経済学史的発展」であつた。前者はその発刊予告が「スマスよりマルクスへ」と題してゐるように、スマスを開祖とする個人主義経済学とマルクスの社会主義経済学との思想的連結を理論面と政策面とにわけスマスの労働価値説がリカードウを経てマルクスに展開したことに於いて、スマス—リカードウ—マルクスの系譜をとらえ、他方スマスの政策論としての自由主義—自由競争—独占反対論を徹底させたら社会主義の主張——資本独占の否認—資本公有論になるからスマス思想のなかに社会主義の萌芽があるとした（この「スマス社会主義化」論は森本厚吉氏によつてより浪漫的にうけつがれ南亮三郎氏の批判をうけることゝなつた）。かくて社会主義思想と二面よりつらなるスマスと資本主義の堅固な弁護論としてのマルサスとがするどく對置され「思想史上に於けるマルサスの地位」が確定されたのは当然で、このスマス・アゲインスト・マルサス論が狭雑物をふくみ誤謬を孕んでゐるにせよ二元論者河上の社会主義者への思想的脱皮過程にむす

わが国のマルサス研究史（市原）

びあわさつていはばその所産として打ち出されてゐることは忘れてはならないであらう。河上の回心ともいえる思想的脱皮のうえでマルサス研究がいかに大きな陰影をおとしてゐるかが以上で察知されるのであるが、だからこそ河上門下ないし影響下にマルクス主義の立場よりする多くのマルサス学徒が生い立つていつたのに不思議はなかつた。⁽¹⁰⁾

まづ河上が、旧弟子としてよりマルクス学の同志であり先輩であるとして遇した、「社会主義は闇に面するか光に面するか」（「改造大正十三年七月号」）「労働者間における産児制限の宣伝」（「我等」大正十二年二月）をかけた榊田民蔵。「改造」論文において榊田は河上批判をおこなう。——河上はリカードウもマルサスもスマスと祖述するものだ、という。しかし河上においては両人が反対であるのはスマスの内の矛盾からくるとし、両人のそれぞれが異つた生産関係を代表するためである、とは説かない。その結果、スマスは生産問題、マルサス・リカードウはともに分配問題をおつかい、ともに分配の不平等な資本家的財産制度の自然的必要に基づき地主のために地代を資本家のために利潤を弁護した。だからリカードウ、マルサスはともにスマスの直系である、というあやまつた結論をひきだすこととなつた。河上のように、両者を有産者階級の味方というにとどまることなく、地代に関する両者の論著やマルサスの恐慌論を検討すればマルサスとリカードウの経済学説はおなじく労働者階級にたいする資本側の階級意識の表象であつても、前者

は地主階級の代弁であるに反し、後者は資本家階級の代弁であり、これは当時において全勞働者階級にたいする全資本家階級の攻勢をしめすと同時に、資本家階級内部の分裂抗争の情勢に照応するのであつて、兩者の学史上における地位もこの点にもとめ得る、と櫛田氏は結論づけた。さらに「我等」論文では資本論やカウツキーの「自然と社会における増殖と發展」(一九一〇)やエンゲルスの「経済学批判大綱」(一八四四)を引用しながら、産児制限運動の階級性について日本の勞働運動とむすびつけて吟味している。その他河上門下のマルサス研究として、つぎのような諸氏のものあげられよう。——河上の「序」を附して大正十二年にマルサス初版訳を出し、その他にも「マルサスの地代論に就て」(経済論叢第十七卷五—六号大正十二)や「マルサスの恐慌論」(同第二十八卷四—六号、昭和四)をかけた谷口吉彦氏。「経済と自由」(大正十二)、「リカードオの価値論争及び其の批判史」(昭和四)、「マルサスとリカードオとの地代論争」(大阪商大経済研究所一号昭和七)をかけた堀経夫氏。「人口原則に関する一論」(思想七十四号昭和二)、「リカードオの勞賃論とマルサスの人口原則」(経済論叢第二十五卷二号昭和二)、「勞賃学説の史的發展」(昭和二三)、「リカードオ価値論の研究」(昭和六)をかけた森耕二郎氏。「唯物史観よりみたる経済学史」(大正十五)をかけた住谷悦治氏。これらの諸研究によつてマルサス説についての多元的解釈が綜合され、河上のような有産者階級の弁護論である

というような巨視的視角からリカードウやスミスとの対比のもとでの徹視的視角に転じ、資本と土地所有との過渡的対立を地主階級の立場で反映した理論であることがあきらかにされ、マルサスとリカードウとの価値論上における対立—支配勞働価値説と授勞働価値説との対立の意味と役割の相異、繼承問題、マルサス人口論と価値論および地代論との關係、価値論と恐慌—景気変動論との連繫などについての筋のおつた説明をきくことができようになり、マルサスの統一像は人口論者マルサスと経済学者マルサスとの二重写しとしてあきらかになつてきた。堺利彦は大正八年に「代表的学者としての福田徳三の時代が去つて河上肇の時代が来た」とかいたが、マルサス研究史としてみても、先駆的な福田—大西の時代が一過して河上山脈とでもいえようマルクス主義者の批判的研究の時代がきたのであつた。

しかし、もちろん、マルクス主義の立場よりするマルサスの批判的研究は河上山脈に位置した人々にかぎられはしなかつた。——たとえば「マルサス価値論」(社会政策時報九十三号、昭和三)の波多野鼎氏。「政策家としてのマルサス」(「経済学論集」第八卷三号昭和五)をかけた大河内一男氏。「マルサスの穀物条令論」(「農業政策の諸問題」昭和六所収)の舞出長五郎氏。高野岩三郎氏とともに人口論初版を訳刊(大正十三)するとともに、矢内原氏のマルサスの人口論とマルサスのそれとの両立論を批判した「人口論におけるマルサスとマルクスと

の交錯「経済学論集」第四卷三号大正十五）をかいた大内兵衛氏。このうちとくに注目されるのは大内氏の矢内原批判論文であつた。さきに解説した河上のマルクス研究に多くを負いながら資本論や剰余価値学説史やカウツキーの Kautsky, Vernehrung und Entwicklung in Natur und Gesellschaft, 1910. を要所所に引用し、マルサスの絶対的過剰人口論とマルクスの相対的過剰人口論が絶対的に両立しえないことを、カウツキーをふくむドイツ社会民主党内での社会主義者はマルクス主義者たりうるか否かという現実の論争と噛みあわせて検出し、日本におけるマルクス・アゲインズ・マルクス論の水準を第五期において代表したものであり、今日においても味読すべき説得力をもつている。（大西や福田の第四期を代表したマルクス・アゲインスト・マルクス論と比較せよ。）他に在野の国家社会主義者高島素之氏につらなる高島山脈ともいへべき神永文三氏、安倍浩利彦氏、松下芳男氏等の研究がある。「マルサス人口論の価値」〔堺編「新社会」大正九〕、「マルサスの人口論」〔改造〕第九卷十二号昭和二）、「地代思想史」〔昭和三〕をかいた高島、高島の影響下に大正十四年に人口論第七版を訳した神永、「経済思想十二講」（大正十五）をかいた安倍、カウツキーの「自然と社会における増殖と発展」を昭和二年に抄訳した松下。以上を大観してあきらかなように、第四期に大西・河田・福田によつて手をつけられ第五期にはいつてマルクス主義者によつて劃期的に前進せしめられたマルクス・アゲインスト・マルクス論によ

わが国のマルクス研究史（市原）

つてのみマルクス研究が科学性を獲得できたということ、いかえるとマルクス経済学におぶさることによつてのみその理論的前進ができたということは、日本における古典学派研究の道順とほとんど変つていない。⁽¹²⁾ このことの反面の事実として日本社会政策学会の分裂左派以外の線に拠るマルクス研究にはとんぜん限界が予想されるのであつて、別して学会右派のワグナー主義者金井延やその系譜につらなる北岡寿逸氏や日本尊嚴論時代の河上肇のマルクス研究が通俗を一步も出なかつたのをみれば多くいうを要しない。スミス研究においては彼を厚生哲学の戦士や植民地抛棄論の斗士とすることにより相当顕著な業績をしめし得た学会中間派がマルクス研究にはあまり精彩がないのもその責任は研究主体の側にはない。そこで乏しい中間派のマルクス研究をみてみよう。——植民政策論の視角からマルクスとの両立論をふりかざしてマルクス研究をおこなつた、「植民政策の新基調」〔昭和二〕や「人口問題」〔昭和三〕の矢内原氏。新自由主義をかかげ猪岡謙一、小田橋貞寿、美濃口時次郎、阿部源一、杉本栄一、小倉正平、森田優三、南亮三郎、左右田武夫、山中篤太郎の諸氏を擁して日本経済研究会を主宰し日本人の統計的研究とあわせて海外のマルクス研究文献の紹介等を精力的におこなつた上田貞次郎氏。ブルジョア唯物論を代表する唯一の存在として社会学的視点からユニークなマルサス批判——「人口問題の自然科学的意義と社会科学の意義」〔我等〕第九卷九号昭和二）、「人口の概念を産み出した統制組織」〔同上

誌第九卷十号昭和二)をかけた長谷川如是閑氏。「人口論」(財政経済時報十四卷八号昭和二)、「邦訳マルサス人口論解題」(三田学会雑誌第二十三卷九号昭和四)、「マルサス」(岩波経済学辞典、昭和七)をかいいて、人口問題が人口にたいする食物の不足によつてのみおきるのではなく、この点マルクスの失業問題の重視は首肯されるが、さりとて失業問題が解決されたその暁に人口問題のごとく解消するとは考えられず、この点にマルサスの真理があるとし、両立論を主張した小泉信三氏。師であり監修者である小泉の解題を附して人口原理第六版全訳をおくり(昭和四一五、上下一巻)、わが国における正版の決定的全訳の歴史を終えさせた寺尾琢磨氏など。

以上でうかがい知つた、全般的危機の到来がもたらした社会政策学会の党流的分裂とその分裂各派によるマルサス研究が、ことの発展の必然性として各派間の論争にいたるのは予想できるのである。この人口論争の前後に大正十年にはじまつた河上と福田の、そして両者と、高田、猪俣津南雄、山田盛太郎氏等が参加した再生産論争、大正十一年におきた小泉と山川均の、河上と櫛田の、つぎに舞出と土方との価値論争、昭和三年を起点とする土方と河上の、そして両者に高田、櫛田、猪俣、向坂、山田勝次郎がくわつた地代論争があり、左派と中間派の、左派と右派の、左派どうしのマルクス経済学説に関する論争をつうじて、マルクス価値論、再生産論、地代論の解釈・研究水準は飛躍的にたかまつた。昭和人口論争も著名な経済学

者のほとんどを三天陣営に動員したこの壮大な三論争とその発生土壌をひとしくして相互に制約しあつていたから、日本のマルクス経済学の水準がたかまつたのと照応しあいながらマルサス研究もすでに吟味したような研究方向において飛躍してすすんだわけである。

まづ人口論争の発端は、河上が「貧乏物語」をかけた前後からおとづれたいわゆる「高田社会党時代」に河上とおなじく貧困学に関心をもち生死減少並行の法則や人口の増減と国力の消長、文明と出生率との関係など出生減退の理論を統計的マルサス研究にむすびつけながら消化してゆき、階級対立概念の人口学的征服のため貧乏論をハンゼン・パレットの選良・階級の周流・交替理論にむすびつけてついに貧者必勝の信念をもつこととなり、大正十四年には唯物史観克服のために一種の人口学史観——「第三史観」を提唱するにいたつた高田保馬氏の「産めよ殖えよ」(経済往来第一卷五号昭和二)であつた。この小随筆はいう。「私は信じる。ただ産めよ殖えよ。姑息なる救済策などに頼らなくとも事はすむ。窮すれば即ち通せん。殖えさへすれば、而して之に応じてすべての文化的活動と経済的活動で盛んになれば国内はなお多数の人口を養ひ得る余地がある。商工業立国の基礎の確立し得ないのは生活費の不相応に高きが故である」と。これにたいし河上博士は積年のマルサス研究の知養を動員して社会問題誌上に次の三文を載せて俗説を批判していつた。「——資本主義末期の一症状としての人口過剰のうめき——人口過剰の原因

および対策に関する世論の批判」(同誌七三冊)、「鈴木文治氏の人口制限論(人口問題批判拾遺の一)」、「生活難の事実を言葉の上で否認することにより之を解決せんとする、高田、氣賀二博士の意見—資本主義弁護論の現象形態の一つとしての僧侶的装束(人口問題批判拾遺の二)」(同誌七四冊)。高田、河上論争を契機に左翼からは向坂逸郎、吉田秀夫、淡徳三郎、東浦庄治氏が、中間派からは永井亨、那須皓氏、その他清沢河、室伏高信氏が参加し、昭和八年にいたる間に熾烈な論争がくりひろげられた。論争主戦者の成果をおさめた文献として、高田「人口と貧乏」(昭和二)、河上「人口問題批判」(昭和二)、那須「人口食糧問題」(昭和二)、淡徳三郎「人口論」(社会科学第三卷四号昭和二)、向坂「人口理論」(改造社経済学全集第二十六巻所収、昭和四)、永井亨「日本人口論」(昭和四)などがあげられる。向坂氏のもものは「マルクスの人口理論のやや詳細なる解説、マルクスに於て充分詳細には述べられていない点の展開」を意図したものの(同氏序)で、補充には主に、マルサス主義者であることをやめマルサス説を自然の理論としても無効であることをその孤立化的方法批判に眼目を置いて論じたカウツキーの「自然と社会における増殖と発展」(一九一〇)や、彼の社会民主党内のマルクスとマルサスの両立論にたいする批判論文を使っている。もつとも頑強に高田批判をおこない高田説が結局は、「マルサス説の縮少再生産」であることを裏づけた吉田秀夫氏は、論争成果を最大限に摂取して「経済学研究」(昭和七)、「マルサス批判

わが國のマルサス研究史(市原)

の発展」(昭和八)をかき、論争終結後もマルサスにたいする批判的研究に生涯をうちこんでいつた。この日本マルサス研究史上劃期的な二著は「資本論」や「大綱」や「剰余価値学説史」のマルサス批判や相対的過剰人口論を全面的に摂取し、こと学史に關するかぎりもつとも本源的な第一次の典拠によつて立論するといふいわゆる原本主義を採つて研究方法にも新味を出している(恩師堀経夫氏が原本主義をわが國で最初に徹底的に採用されたことに学んだと序言している)。これらで吉田氏は日本におけるマルサス研究史の成果を事業において集成し、経済学者マルサスと人口論者マルサスとを綜合しその歴史論と經濟理論と人口理論とを一元原理的に把握した。マルサスを一元原理的に認識するということは、彼のいわゆる「人口原理」Principle of Population をその地代論、恐慌論、勞賃論、歴史論と間然なく統一的にとらえるということで、このような形で「人口原理」で何であるかに即座にこたえるのは、堅実を旨とする經濟学者のよくするところでない、というのがイギリスにおいてはキャンナンらしい、わが國では大正五年の河上博士らしいの通見であつた。吉田氏は原本主義に拠つてその著述からは一見して日本のマルサス研究に負つていないようにみえるが、事實において大西、河上の先驅的業績から河上山脈につながる人々や大内氏のマルサス歴史論、価値論、賃銀論、地代論、恐慌論の研究成果を充分に摂取しているのである。——マルサス人口と食物との直接対比によつて定立した自然の人口原理を社

会法則に飛躍させ、ここで構築された社会的人口三位一体の原理——社会理論を人類史に妥当させ、人口と食物に関する社会波動の理論を打ち出した。これを「自由社会」に適用するとブルジョア的な経済諸範疇——価値、労賃、利潤、地代等々が使用されつつ特殊化されたものとしての経済理論が構成される。吉田氏はこのような形で人口論者マルサスと価値論者マルサス地代論者マルサスとを一般と特殊の内的関係において一元的にとらえたのである。

★ ★ ★

大河内氏の「政策家としてのマルサス」は、イギリスにおけるフランス革命によつて激成されたホイッグ貴族体制の危機を中間層の育成によつて切りぬけようとするマルサスの政策観に焦点をあて、中間層政策こそマルサスの問題であるとともに二〇世紀独占資本主義の問題でもあることを指摘していた。大河内論文がかかれる二年前——金融恐慌で中小企業は地方銀行とともに決定的に没落期に立たされておられ、彼らの反財閥機運は弗買事件のご昂進しついに満州事変のご財閥は中小企業にたいする商業支配をゆるめていわゆる「転向」工作にはいるのであるが、この転向機運が濃厚となつた昭和七年に谷口吉彦「購買力補給案——ネオ・インフレーション」がかかれた。谷口氏は昭和初期にいたる、もつとも師河上の影響がよかつたときに、マルサスの地代論、恐慌論に先駆的な業績を出したが、ネオ・

インフレーション執筆当時にはもう緒についた国家独占資本主義的傾向に感応してしだいに経国済民的発言がよくなつており、この補給案も例外ではなかつた。それは、「ケインズ的な不況対策をケインズ以前に提唱されたもの」で、「この提案の内在的性質より来る必然の結果として、最も多くを農村に尽すこと」を要求したこの救済案は、昭和七年以降の農村匡救事業によつて現実化されたのであり、六年に恐慌の底に沈んでいた農村を七年を転機とし八年に特殊な不景気局面に転入させる一助となつた。ネオ・インフレーション案は救済インフレとなつて現実化したのである。河上門下としてマルサス恐慌論を研究した谷口氏はマルサスの過小消費説に感服し、アンティ・ケインズアンとして恐慌救済案を提出されたわけであり、ケインズによる経済学者マルサス復興以前にマルサス—ケインズの系譜を自らの発想で験しされたわけである。——その翌年、昭和人口論争が終止符をうたれた昭和八年にケインズはマルサス恐慌論にふれつつ、「十九世紀の経済学が生れ出た母胎がリカードウでなくてたんにマルサスだけであつたなら、世界は今は何となるかにヨリ賢明なヨリ富んだ場所となつていたことである⁽¹⁵⁾」と述べ、アメリカにおいてもマックラケン⁽¹⁶⁾はマルサスの経済学の主要点を支配労働、価値論、需給論、恐慌論なりとし、有効需要と比例の維持とを強調するマルサス経済学の「復興」⁽¹⁶⁾によつて時勢は熟していることを宣言していた。このマルサス復興または復活(rehabilitation of Malthus or renaissance of

Malthusian Economics) のいみじくは、まづ何よりも人口論者マルサスの蔭に埋没していた経済学者マルサスの発掘であり、つぎにリカードウ経済学の盛名のために忘却されていたマルサス経済学の顕彰であつた。この気運は吉田秀夫氏のマルサス「経済学原理」第一版の訳刊(世界大思想第九七巻、昭和九)前後に、とくに昭和九年十二月二十九日に國の内外にやつてきたマルサス百年忌を追憶する各種の行事によつて完全にわが國のものとなつた。海の彼方ケンブリッジ大学では記念式典が催され、ボナー、フェイ、ケインズが追稿講演をおこなつた。わが國では慶応大学理財学会が記念講演会を催し、寺尾琢磨氏が「マルサスの生涯及び学説」を、小泉信三氏が「人口論におけるマルサスとマルクス」を、矢内原忠雄氏が「マルサスと現代」を、高橋誠一郎氏が「マルサスの経済学史上の地位」を講演している。高橋氏の演述の主旨は三田学会雑誌第二十九巻一号(昭和十)に掲載された「トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂『経済学上の新学派』」からうかがい知られるが、スミースリカードウ・マルクスの労働価値説の發展系譜と、マルサスの需給説を価値論のオリジンとする現代英国経済学の形成系譜とを対置させてこゝにマルサスの学説史上の位置をもとめている。矢内原氏のものとはまったく同題目で「改造」第十七巻一号(昭和十年一月号)に掲載された。こゝで氏は資本主義國の生産發展段階を三つにわけ、各段階について「マルサス学説の理論的妥当の限界」を論じたのち、自由擁護者としてのマ

ルサスの一面を描き「彼が空論を排して学問的、法的、權威を主張し、専制權力を排して自由を高調したる精神は、彼の学説の理論的価値の如何に抱らず、人民自由を愛する学者の態度として永遠的価値を有する」として「彼を現代に追懐する」の結びにしている。こゝで注意を魅くのは、「マルサスは社会貧困救済の根本策として個人の責任を高調し、結婚制と私有財産制の維持を必要とした。彼が資本主義の弁護者たりしことは明かである。併し乍ら彼の時代にあつての資本主義弁護者と今日の時代に於ける資本主義の擁護者とは、自ら其の歴史的地位を異にする。マルサスの場合にあつては、資本主義は封建的専制に対する新興勢力であつた」「彼は資本主義を擁護した。併しその事により彼を以て民衆の抑圧者、進歩の敵であると為す事は当らない。否、彼は資本主義の擁護者でありたればこそ、彼の時代に於ける進歩的思想家であり得たのである」「凡ての人の学説事業の意義は、その時代に於て歴史的に考察せられねばならない。従つてマルサスを以て人民自由の敵と見ることが誤謬なるが如く、凡ての時代凡ての場合に於ける彼の祖述者を以て人民自由社会進歩の友であるといふことも出来ない。マルサスの人口理論を墨守し、之を以て歴史的な各生産段階を通じて貧困原因の唯一無二の説明であると爲し、人口増加の自制以外に貧困救済の根本策無しとの主張をば凡ての場合に適用するものは、之れ亦社会理論の歴史性を無視する謬見と言はねばならない。但しこの場合進歩の敵たる者は、マルサスのかかる利用者

であつて、マルサス自身ではないのである」という敘述であつた。かつて山本長田氏とスミスの植民地論をめぐつて論争した矢内原氏は軍事的封建的帝國主義の手中から植民地放棄論の進歩主義者スミスを奪還するところに時論的狙いをもとめた。「マルサスと現代」においてもマルサスを封建専制と闘う新興資本のイデオログとみ、第三段階の資本主義の代弁とは対照的な上昇期資本主義のイデオログ・マルサスに自由と進歩の友人をみいだしたわけであるが、当年におけるマルサス研究の水準はこのようにマルサスをスミスと同列に置いて日本帝國主義にたいする側面批判的思想家に仕立てるべくあまりにも高すぎた。——スミスがマニユ時代の總括的經濟學者として旧帝國主義に対抗的であり得た初期産業資本のイデオログであるとなれば、マルサスはスミス段階から一步前進した産業資本のイデオログ・リカードウに拮抗し、新興資本主義の發展が旧勢力の物的基礎を提供するかぎりにおいて支持した、むしろその發展を逆方向に制約する支配階級内の保守層の代弁であつた。矢内原氏のように「封建的専制にたいする新興勢力」つまり「専制勢力を排した資本主義の擁護者」とみることとは、主客顛倒の逆説で、「スミスのなもの」が絶対主義とマルクス主義にたいする二正面作戦を採る中間派——生産力論者の思想的支點として恰好であつたのに、「マルサスのなもの」が二正面作戦の支點となり得ぬ、当年の絶対主義下日本の思想的戦略のあり方を直載にしめしていた。——

ところで百年忌記念としていま一つのみごとな成果があらわれた。小樽高商研究室が同学十一氏の執筆をえておつた「マルサス研究」（商學討究第九卷中下合冊特輯号）で、編輯者が序文でいうように、「時恰かも、西に東に起りつつある『經濟學者』マルサス復興の聲」を歓迎し、マルサスの經濟學上の業績を人口論者とともに全面的に再吟味することの必要を述べ、全面的系統的にマルサス研究を集成せんとしたこと、を誇つてゐる。ここに論稿を寄せたのは、上田貞次郎、堀経夫、手塚寿郎、坂本弥三郎、伊藤久秋、大野純一、高橋次郎、吉田秀夫、小泉丹の諸氏である。本号をマルサス生誕一五〇年を記念した經濟論叢大正五年五月第二卷五号と比較・検討すると、マルサス研究家の世代的轉移の姿をみるとともに、なによりも研究水準が精緻さと深度とをくわえ大正五年にはほとんど見向きもされなかつたマルサス地代論、恐慌論、価値論が全面的吟味の素材となつており、經濟學者マルサスの吟味にこそ主力がおかれてゐるのに今昔の感を催すのである。上田論文「マルサスと現代の人口問題」はマルクスのマルサス批判の意味を認めつつも、人口の自然資源による制約という根本命題の把握にこそマルサス説の正しさがあるのであつて、天然の制約は社會主義社會でも免れないから、社會主義者と雖もこのマルサスの論拠を覆へすことはできない、とし、すんで現代日本の人口問題にまでふれてゐる。堀論文「經濟學史上に於けるマルサスの地位」は、高橋論文「マルサスと英國古典派の動態理論」とも

に、日本ではじめてマックラケンの「価値論と景気循環」(一九三三)に注意を促したもので、マルサス価値論は常識的な需要供給説ではなくて厳密には限界購買力説と名づけるべきであることを主張したものである(高橋誠一郎氏のききにせしめたような、マルサス価値論供給説にたいする実質上の批判)。高橋次郎氏のものは、限界効用価値論にハッキリ立つて按下労働価値論では景気変動を説明できないとみるマックラケンを事実において批判したとみられよう。——真正な価値論を欠除したマルサスは資本蓄積の問題を再生産過程の分析において正しく展開することができず、したがって景気変動をその根本原因に溯源して究明することができなかつた。労働価値論をもつたリカードもそれが未完成の価値論であり問題の取扱いが妥当でなかつたため今日みるような恐慌論を成立せしめることができなかった。リカードウが沈思した価値論とみあう礎石的な下部段階とマルサスが立つた表層的な上部段階とを成功的に連絡させ「恐慌の必然性」をあきらかにし真の動態理論を確立したのがマルクスである、としたのである。小泉医学博士の「マルサスとダーウィン及び社会ダーウィニズム」は、マルサス人口論がダーウィン説の思想的オリジンとみるような俗流唯物史観論者の見解(たとえば大正五年の河上の「若く夫レ此ノ第十八世紀ノ唯心的理想論ノ沸湯ニまるさすノ注イダ冷水ガ、流レ流レテ計ラズモ先ゾダーあん、うをいれず等ノ冷酷ナル進化論的思想ヲ生ムノ源トナリ、余波更ニ経済学者ニ逆流シテ遂ニまるくす唯

わが国のマルサス研究史(市原)

物史観ヲ生ムニ到リシガ如キハ偶々以テ学界ノ一奇縁ト為スベキモノ」との解釈に代表された)を事実において綿密にただしたものの。吉田論文「人口論史の三つの型」は近代人口論の歴史的理論には三型を鑄出しこれの盛衰を資本主義の発展段階に即応して述べたものであるが、社会理論として完全に破産しているマルサス説が自然理論としても事実において追放されていることをカウツキーに扱いつつ強調している。さきに紹介した向坂氏の「人口理論」や「マルサス・ダーウィン・マルサス——人口論をめぐりて」(「会議」昭和七年一月号)がダーウィニズムをマルサス主義と区別しマルクス主義からマルサスの名をたたき出さんとした努力——論点とあい覆うもので、同舟した小泉論文によつても傍証が提供されたわけである。⁽¹⁸⁾

ところで吉田論文がその結尾に「マルサス死して百年、人はこの時を如何に記念しようというのであろうか?マルサスの『偉業』を想起してその『真理』の前にもう一度額づかうとでもいうのか?その反対でなければならぬ」とつよくマルサスにたいする否定的批判の辞をあたえたのにならぬ、南論文「マルサスの人口理論」は結尾に「成心ある者、無視する者には、マルサスは無縁である。この一瞥は百年忌マルサスへではなく、真実にマルサスを解せんと欲する人々に捧げられてよい」と述べマルサスへの熱い傾倒を披瀝されて対蹠的である。——南氏の人口論への関心は師大西猪之介氏より受けたものである。⁽¹⁹⁾氏の処女作「人口法則と生存権論」(昭和三)は、左右田・福田論争の焦

点であつた生存権論をマルサス説を大前提にして再吟味をくわへ、窮極のところ生存権の認承は出産権の制限を前提とし、出産権の認承は必然に生存権を否定するというところにあるとし、「生めよ殖えよ」の自由放任主義を主張する福田氏が同時に生存権の社会政策を主張し牧野英一氏が「最後の一人の生存権」（「改造」大正十三年十月号）を提言することの矛盾を衝いてゐる。氏の研究方向は近代人口論（生物学的、社会学的、経済学的）の一切の想源をマルサス説にもとめ思想と人間とにおいて間然なくマルサスを敬愛するという態度でつらぬかれており、氏の「小樽時代の傑出した一学生」吉田氏が僧侶マルサス Parson Malthus の批判的研究に生涯をゆだねていつたのと対照的な、師弟が分つた行路であつた。その研究方向において三様であつたが、吉田・南氏に伊藤久秋氏——研究支点をポーナ—⁽²⁰⁾におき日本におけるさいしよの組織的なマルサス研究書「マルサス人口論の研究」（昭和三）をおくつた——をくわえてマルサス研究に専心する三学究を第五期にもつたことは、マルサス研究史上注目すべきことといわねばならない。

以上でうかがい知られるようなマルサス追禱の華々しいカンパニヤを昭和八年三月のマルクス五十年忌が黙殺されたのと比較することは当を得ていないが、リカードウ百年忌がマルクスと同様に陰鬱に送迎されたのと比較することは妥当であり興味あることでもある。舞出長五郎氏は「特に一九二五（大正十四）年がリカード死後百年に当り、それを記念する企ての殆んど見

られなかつた我国において、一九三四年マルサスが記念せられる」ことに注意を魅かれている（「マルサスと経済学」帝大新聞五四六号特輯号）。しかも前年にヤット恐慌の底から農村をはい出させるむかえ水となつた救農インフレの作用にもかかわらず、この年九年にまたまた東北は凶作飢饉におちいつた。悲報が重來するなかでの学界のマルサス追禱ブームを超越的に批判したのが、相川春喜「マルサスの学史的運命」（歴史科学、第三卷十三号先哲記念号）であつた。学界はこのマルサス景氣を反映した作品をさらにうみだしていた。——「報酬遞減法則」ばかりでなく、「蓄積による過剰生産」や「不生産的消費」説の重要性を説き、これを「恐慌の必然性」とむすびつけて、「（マルサスとマルクスの）人口理論では極度にまで相対立する二者の見解が恐慌論では手を握りうる事情にある」ことを強調した高田保馬氏の「マルサスと近代景氣論」（経済往来第九卷十一号昭和九）。百年忌によせて、人口論者マルサス以上にリカードウの批判者としてのマルサスをもつと高く評価しなければならぬとの主旨を、新発見のマルサスの手紙を引きながら論じた小泉信三氏の「マルサスの百年所感」（「ダイヤモンド」第二十三卷一号昭和十）。マルサス再興の魁けとなつたケインズの「マルサス伝」（一九三三）——山田長夫氏の興味ある研究によると、これはケインズがモスクワにおけるわが福田徳三氏との論争に触発されておきたマルクス・アゲインスト・マルサスなる問題意識の産物であり、彼の有効需要問題への開眼をしめす重

要文献である——をさつそくうけとめた伊藤久秋氏の「ケインズのマルサス伝を読む」(「商学と経済」第十四年二冊昭和九)。渡辺一郎「経済学説の史的研究——スミス、マルサス、リカードウ」(昭和十)など。

さきにわたくしは昭和人口論争が昭和八年に終熄したむねかいた。しかし事實は終結せざるをえぬ、論争の展開を阻む政治情勢となつていた、ということである。吉田氏の「高田博士とマルサス再論」(「批判」第四卷三号昭和八年三月)をみてもどこにも人口論争うちまきりの口吻はみえぬのであり、南氏の評言をかれは「蛇の執念の泥仕合で結末を告げた」のである。論争をつづけるべき論争外的情勢がないところに蛇の執念の結末が生じた。

——日本社会政策学会の右派と対立との対立で微妙にあらわれ政治的に処理された先駆的事件として森戸事件がある(大正八年におき、東京大学金井延経済学部長と同助教授森戸氏との対立)。このような事態が昭和恐慌期にはいつて頗発するようになったのは当然で、高田批判に精力的だった河上、向坂両氏はそれぞれ昭和三年に大学を追われ、スミスとマルサスに自由と進歩の友人をみいだして時代批判をおこなつた矢内原氏も昭和十二年に大学を追われ、それとあい前後して「人口論におけるマルクスとマルサスとの交錯」をかいた大内氏も學園を去つた。(両氏と土方成美部長との対立)。この年——昭和十二年に「軍財抱合」体制はなり、過剰人口論は姿を消し後期ワグナー主義者北岡寿逸氏の「今や大東亜共榮圏は着々として実現しつつあ

わが国のマルサス研究史(市原)

る、しかしこの大東亜共榮圏を揺ぎなき基礎におくものは、わが国人口の増加とその適当なる配置である」との発言にみられる狂躁的なポピュレーションイズムが横行することとなつて昭和十六年にはナチスばりの「人口政策確立要綱」が立案されている。

この人口学と言論の不自由な時代にもめげず、南氏のマルサス研究は「人口理論と人口問題」(昭和十)、「人口理論と國際貿易」(昭和十三)、「人口理論と人口政策」(昭和十五)、「人口原理の研究」(昭和十八)、「人口原理の確立者——トーマス・ロバート・マルサス」(昭和十九)という続著となつて大部かつ多岐をほこつていつた。「人口原理の確立者」は、経済学者マルサスは復興せられたけれども、枢軸三国のポピュレーションイズムの声・反マルサスの叫びに圧されて人口論者マルサスはいぜんとして不遇であることが嘆かれ、しかも「私は人口の敵ではない、私はただ罪悪と窮困とに対する敵である」と述べたマルサスの真意に耳を傾けるならば、ナチスの総統ヒットラーの「わが斗争」の中にさえマルサス理論の強き脈博が聞かれることを強調しているのであつて、ここに時代の聲音をきく思いである。吉田氏もまた「黎明期の経済学」(昭和十一)「新マルサス主義研究」(昭和十五)をおくつた。経済学説史の研究は昭和十二年頃からそれまでのように文献穿鑿的または古典考証的なものから抜け出し、それ自体一定の方法をもつた學問として成立しようとしていた。舞出長五郎氏の「経済学史概要(上)」

(昭和十二)は剰余価値学説史の本格的な撰取と消化とをつうじて方法的に整序され新しい研究段階にすまうとする日本の学史研究の決算書ともみられる。ここでは経済学史が「経済科学を其の成立発展の過程に於て追求することを任務とする一科学」であるが、それは「単に学説の論理的展開を跡づけるだけでなく、それぞれの学説の時代的背景または制約とまた経済生活の進展に対する学説の働きかけについて分析すべきもの」として規定づけられていた。吉田氏のマルサス研究著や堀経夫「地代論史」(昭和十四)、谷口吉彦「恐慌理論の研究」(昭和十五)、黒田謙一「植民経済論」(昭和十三)等は舞出氏によつて確定された学史研究の方法と基準とを多少にかかわらず撰取したうえで、マルサス研究を内在化した業績とみられる。他にマルサス説にたいする個別研究として人口論の倫理的、人間観的、形而上学的基礎をあつかつた白杉庄一郎氏の(経済論叢第四卷二号、同巻四号、第五卷二号)、人口論にあらわれた南海諸島を吟味した寺尾琢磨氏の(三田学会雑誌第三十六卷四号)、その地代論と対象とした碓正夫氏の(経済学雑誌第十卷四号)、人口論の根本概念を吟味し人口と食糧との比率対比や波動説や宗教的信仰性などを偏見として批判した増田重喜氏の(人口問題第二卷一—二号)諸研究がある。

ところでとくに意味ふかいものは高橋泰蔵氏の「マルサスの富の理論」(一橋論叢第九卷四号昭和十七)と高島善哉氏の「経済社会学の根本問題」(昭和十六)である。高島氏の著書は

生産力増強の立場から消極的に生産関係に立ちむかwantとする、戦時下のいわゆる「生産力」説を、昭和七年から学界に力を伸ばしてきた純粋経済学の方向へでも、昭和十年頃からこれの征服者として姿をあらわしたドイツ流の政治経済学の方向にでもなく、またマルクス経済学の変革的方向へでもなく、いわば第三の方向——「経済社会学」の建設によつて内在化せんとしたもので、生産力説のもつ当然の限界として、マルサス経済学がもつ社会的、性格のためマルサスはスミスと一個同一に経済学の社会学化の師表にされてしまつて(日本型生産力論が矢内原氏においても高島氏においてもマルサスを自由と進歩の友人や経済学社会学の師表とみる二正面作戦の支柱として(ことに注意))。高橋論文は資本蓄積と失業の問題を説明するために従来の研究者によつて比較的等閑に附せられていたスミス—マルサス—ケインズの線に研究の先鞭をつけたもので特筆にあたいする。そして高橋氏はこの路線にながれる共通点が「人間中心の課題意識」であるとして、スミス—リカード—マルクスの「物中心の客観化された世界のメカニズムの法則」をめざす路線と対置してマルサス路線の優位を暗黙に主張しているようである。終戦後学史学界の核心的な問題意識となつた二つの路線の対立はいよいよ実践的意味をくわえている研究対象である。昭和二十八—九年度の二年間にわたつて学史学会はこれを共通課題にしたし、内田義彦氏は「経済学の生誕」においてスミスにおける投下労働・支配労働の併有とそれの両極分

裂、スミスの支配勞働説の意味内容とマルサスの支配勞働価値説との決定的な断絶を説かれ、田添京二氏はさらにステュアート・マルサス・ケインズなる副次的路線を設定してステュアート研究をつうじてマルサスに照明をあて新味を出しておられるが、スミス・リカード・マルクスの基本線を主体的に受容したうえで（つまり実践的主体を自覚しての）このようなマルサス研究はもちろん戦時中には困難なことだつた。（内田氏の業績は高島氏の生産力説的形態におけるスミスやマルサス評価にたいする批判であり、スミスのなまもの・法社会学的なもの・経済社会学的なものが一定の前進的意義をもつた戦前と戦後との戦略段階の変化——段階転進が忘れられてはならない。）

以上、六期にわかつて考察してきたわが国のマルサス研究の系譜と問題視角とが、敗戦後の全機構的なブルジョアの進化によつてどのように重点移動をおこなつたか、きわめて興味ある問題であるが、別稿にゆづらざるをえない。

(1) 昭和八年十一月政府の主唱のもとに設立された人口問題研究会の設立趣意書を見ると「今や貿易及び財界の広範に亘る不況は一層深刻の度を加へ、過剰人口は愈々増大し、つ、つあり、而して又我国人口増加の大勢は、その社会的傾向に於て甚だ憂慮すべき事態に在り、之を放任して顧みざるに於ては国難の打開到底生むべからず」とある。さらに昭和十二年七月の衆議院予算委員会で東郷寅代議士は、農村過剰人口の処理こそ農政の根本であるが、都市工業は

わが国のマルサス研究史（市原）

もはや吸収力をもたぬから農業移植民政策の断行こそ最良の解決策ではないのか、と質疑しており、有馬農相は農村人口過剰論を土地との関係で認めている。

(2) 大塚金之助氏はハッキリと高田保馬、土方成美両氏をフアンズム学者としておられる（経済思想史要領、前掲書十七ページ）。小泉氏のばあいはどうなのか。今日も氏がオールド・リベラリストの代表者のようにみられていることは周知のとおりである。じじつ民本主義者を結集した大正七年の黎明会には参加しておられる。民本主義そのものが妥協的民主主義にすぎなかつたが、当初黎明会に参加した高橋誠一郎、穂積重遠氏はやがて脱落してしまつた。

小泉氏の戦斗的なマルクス主義批判や君主主義の信条を高橋氏や穂積氏のような民本主義からの一種の転向現象とみるのには疑問がある。微妙な点にかかわるが、土方、高田氏とはやはり分別できるのではなからうか（師小泉氏の弟野呂栄太郎氏にたいする態度など）。

- (3) 大正七年十月「國民經濟雜誌」第二十五卷四号所収、全集第四卷一〇五—一〇六ページ。
- (4) 大正七年九月号「中央公論」所収「極窮権の實行」全集第六卷（上）七八—七九ページ。
- (5) 福田全集第三卷一二一—一二二ページ。
- (6) 左右田全集第三卷五五—五七、五四—五七、五七—五九ページ。
- (7) 福田全集第三卷一二一—一二二ページ。

- (8) 福田全集第一巻六五三ページ。
- (9) 南亮三郎「経済学の基礎的諸問題」一〇四、四一—ページをみよ。
- (10) 河上博士はこの段階においてもなお必然論の解釈、自然法則と人道的理想の階調についての解釈については人道史観やマルクスとマルサスとの交錯の残滓（人口史観がブルジョア唯物論的な性格を帯びるための）がみられる。ミルをスミスとマルクスとの中間に置いたり、ラスキンを人心改造という観点からマルクスと同列に置いたのはそのあらわれで、門下にもマルクス主義と残滓とを分身として影響をあたえている。——たとえば門下に河上のラスキン熱をうけつぐものとして御木本氏を出したような。
- (11) マルクス経済学の研究段階をその邦訳という視点から考えてみよう。高島素之の本邦最初の「資本論」完訳は大正九—十三年に刊行されており、剰金価値学説史は大正十四—昭和三年に大原社会問題研究所でパンフレットとして出されたが全訳でなく、完訳は昭和四—六年に改造社版マル『エン全集の一部として出された。「大綱」は嘉治訳が昭和二年に遠田訳で同三年に出ており、前者は改造社全集第二巻（昭和四）に収録された。まずデイル・モンベルト編纂の「経済学研究用抜萃集」第六巻「人口論」に「大綱」のマルサス論が収載され、これが安倍浩訳で大正十三年に邦訳されている。これでマルクス、エンゲルスのマルサス論の主要なものが邦訳されたわけである。——資本論の邦訳がはじめ安倍磯雄によつてつきに福田とその門下宮川実、長谷部文雄によつて着手され、剰余価値学説史が大原社会問題研究所の森戸、櫛田、久留間、大内によつておこなわれ、このマルクス主義の二大文献の邦訳が民本主義者とマルクス主義者の手中にゆだねられ、翻譯における同盟戦線ができたことは興味ぶかい。マルサス人口論の邦訳者や研究主体についても、河上山脈、高島山脈、高野山脈（大原研究所）ともいうべき三系統—民本主義者と社会主義者の共通の場が考えられよう。
- (12) 日本のスミス研究が価値論争を基礎にして価値論—剰余価値論の視角からとりあげた舞出、森耕二郎氏らによつて、つまりマルクス経済学の研究方向においてきりひらかれたとともに、自由主義—生産力派福田氏や矢内原氏や堀江婦一氏らによつてあるいは植民地放棄論の進歩主義者としてあるいは厚生哲学の斗士として研究実績がきづかれてゆき、これら左中両翼によつて絶対主義者からスミスを奪還することに一視点がおかれていたのが注目される。（矢内原氏と長田—山本氏とのスミス植民地論々争をみよ）。
- 日本のマルサス研究史はこの一点でスミス研究史とことなっている。第一期のマルサス研究史ですでに述べたように、絶対主義の線でのマルサス研究には大きな屈折がつきものだったし、第五期のそれであきらかにしたように、生

産力―自由主義の線での研究にもスミスとちがつて屈折が強いられた。矢内原氏が大学追放前にマルサス論の体裁をとつてこころみた日本専制権力―軍国主義にたいする側面批判は、それがマルサスを借りてきたかぎり悲劇であつて、マルサス研究が科学的基準をまもりうる最後の線はおのゝからあきらかであつた。

(13) 吉田「マルサス批判の発展」序言、二一―および「イタリア人口論」序徴十二ページをみよ。なお孫引主義―間接的引用主義―を清算するとともに、日本マルクス主義が病疾としてもつた権威主義にとらわれず、たとえばエンゲルスのアリスン論につきその不穿鑿を批判している(「マルサス批判の発展」一八六ページ(註2)をみよ)のは当時として異例の態度といえる。南氏は吉田秀夫氏につき次のように述べている。「吉田君は小樽時代の私の傑出した一学生であつたのであり、のち東北大学の堀経夫博士に私淑してマルサス研究のスタートを切るや、絶えず私とは同分野を後に先になりして駿足をのびした競争者であり、しかも又マルサス研究においては私とは正面から対立し抗争するところの峻烈な批判者であつた」(南「日本における人口問題研究の展望」(一)「四八ページ」と。吉田氏もまた間接には河上山脈につらなつていた。

(14) 松井清「谷口先生がこされたもの」経済論叢第七九卷三号六四ページ。

わが国のマルサス研究史(市原)

(15) Keynes Essays in Biography 1933. pp. 141. & 144.
(16) Harlan Linnens McCracken, Value Theory and Business Cycle, 1933, p. 136.

(17) H. W. Spiegel (ed.), The Development of Economic Thought—Great Economists in Perspective, 1952, pp. 811. 中「The Classical School」(邦訳あり)をみよ。

(18) カウツキーは「自伝」の中で「社会の進歩にたいする民族増加の影響」(一八八〇)をかいた当時自分はJ・S・ミルの思想とダーウニズムの影響下にあつたと述べ「マルサスに対する社会主義者への異論、すなわち食糧獲得圏のその時との拡張にたいして人間の増殖力が神秘的に適應するといふ考え方は、私には無意味に思われた。私は七〇年代の中頃にしてにわか的重要視されてきた新マルサス主義に救済の道をみいだしたのである」と書いている(世界大思想全集「カウツキー・プレハノフ」二七八―九ページ)。彼はこのマルサス主義に受縛されたことの反省から、これとダーウニズムとは単に形式的にしかもわずかな一点で通じているにすぎないとの見地に立つていつた。「自然と社会における増殖と発展」でマルサスの出発点が全体から切りはなされた個別である。これは資本主義的個人主義に誘われまた低級な思考は直接的個別から進み安いという通弊に導かれて人口を論ずるときも個別から出発し不均衡と陰惨な結論にたつたものである、しかし全有機体の動的連

関から出発したら均衡と調和の結論に到達できるであろう、とし、意識的に社会理論の分野だけでなく、自然理論の分野からもマルサス説を追放せんとしたのである。

(19) 南氏は師大西氏からうけた影響について次のようにいわれる。「憶えば私の処女作『生存権対人口法則の問題』（国民経済雑誌大正十四年一・二月）はその前年の二月十日に行われた大西教授の三回忌追悼講演会の講演に端を発するもので……根本的発想それ自身は教授の原論講義より得たものであり、又それ以後今日に至るまでの私の人口論への傾倒は或る意味に於て教授に依つて触発されたものである。」（商学討究第一卷上冊「大西教授と人口論」なお社会政策学会幹事でもあつた大西氏が何派的傾向をもつたかはきわめて興味ある問題であるが、中間派の首将福田氏の大西評を紹介するところである。——「正直に言えば私は大西君の学風も人物も余り好きではない。……大西君が津村博士の感化をもつとも多く受けられたことは同君の爲めに残念此上なき事と私は確信する。又た後にいたりて左右田博士の影響を其の善い方面よりは寧ろ悪い方面に於て甚だ多く受け入れられたことも残念である」（大西全集、第十巻序言三四ページ）左右田氏は福田氏と生存権論争をおこなつたが、福田氏と吉野作造との提携によりおこされた黎明運動には文化的自由主義者としてすすんで参加したし、米騒動にのぞんでは福田や牧野のように大きな衝撃をうけ

民衆の側からこれを哲学しなければいけないと考えた。晩年には新カント派社会主義に関心をもち、社会事業や労働組合法問題に腐心しその門下から彼がもつとも囑望した本多謙三のようなマルクス主義に到達した経済哲学徒を生み出しているが、その積極的な分身が本多であるとしたら消極的の分身が杉村広蔵であろう。だから左右田経済哲学の積極面を評価しその貨幣矛盾論をマルクスの商品矛盾論と類比してマルクス主義との親近性をいう人もあるくらいである（渡辺彦太郎「左右田学説の展望」理想昭和三十三年六月号をみよ）。その「テレオロギー考察」（大正十二）において、所有権なるものが論理的には基礎づけが不可能なることを論結して、所有権の否定という実質的には社会主義的帰結をそのカント研究の決算として打ち出していることに注目されたい。福田博士は大西氏が左右田博士の影響を悪い方面に甚だ多く受け入れたといわれるが、それは左右田哲学の思弁的論理主義の否定面をより強く採り、左右田哲学の現実的関心や文化的ヒューマニズムを欠落して大正期デモクラシー運動からも浪漫的に乖離していたことを指すではあるまいか（大西は黎明会にも参加していない）。福田の「生存権論」と背反してマルサスの人口法則を論理主義的にうけ入れた大西の「人口法則と生存権論」（全集第二巻「経済原論」上四四ページ以下）をみられたい。

(20) 伊藤氏を熟知する寺川末治郎氏の本書の紹介（「商学

と経済」第九年二冊、昭和四年三月）中の一節を引いておく。……「私は想像する。恐らく伊藤教授は此の研究にあたり先づボナーを読んで其詳細を自己のものとせられたのであらう。マルサスに対する興味もボナーから得られたのでは無からうか」

(21) 山田長夫「ケインズの人口論」横濱大学論叢、第二巻一号(昭和二十五)。

(22) 北岡氏が日本における典型的なワグナー主義者金井博士の亜流たるゆえんは、北岡「金井教授と我国社会政策の指導原理」(東京帝大経済学部紀元二六〇〇年記念文集)についてみられたい。

(23) 他に伊藤久秋「経済思想と学説」(昭和十)や高橋誠一郎「経済学史(上)」(昭和十二)がある。なお戦時下日本の学史研究の景況を労農派マルキンズムの立場から観察したものとして、大内兵衛「古典の探求と重商主義についての新解釈」(「決戦下の社会諸科学」大原社会問題研究所編所収昭和十八)をみられよ。

——以上——

〔附記〕 戦後日本のマルサス研究史の考察は統稿で扱はれるから、本稿と引合はせて参照されたい。また平凡社「人口大事典」に載せた拙稿「日本における人口学説の発展」は無断切除があつて文意不明部分があり、その補完に本論文を読んで頂ければ幸甚である。

わが国のマルサス研究史(市原)